
『戦想 - Anti-real / Un-real -』

人工 工人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『戦想 - Anti-real / Un-real -』

【Nコード】

N3011Q

【作者名】

人工 工人

【あらすじ】

剣戟の音は遙かに、遠く遠く残響する。

人の心が夢を見るのなら、夢と現実の違いなんてあるのだろうか。この『心』とて、確かにここに在る現実なのだから

幼い頃、少年には世界が灰色に見えていた。

色覚は正常。目にした色の区別はつく。

頭の中でのみ色は鮮やかに描かれる反面、色を失っている世界はあまりにもつまらなく見えた。

時は流れ、無情にも戦いの季節が訪れる。
少年　永久宮逝人は生まれ育った街にいた。
なぜか見覚えのない空、服、そして首輪。
覚めたばかりの目に映ったのは、荒廃した街並み。
子供だけが残されたこの街で。
生きる為に人が人を殺さねばならないこの街で。
さあ、自らの名の下に。

現実を、迎え討て。

ブローグ『選び取った結末』（前書き）

1 / 27 修正入りました。

既に原文はありません。

これからも修正するかもしれないので、身勝手ながらよろしくお願い致します。

プロローグ『選り取った結末』

『選り取った結末』

それは、殺し合いだった。

人気のない礼拝堂。

首輪をつけた二人。

それはさながら、コロッセオに立つ剣闘士のように。

肌を刺す寒気さえ感じる静謐な空間で、剣と剣のぶつかり合う、

あまりに場違いな筈の金属音が響く。

しかし、何故だろうか。

場にそぐわない筈のその音は。

その澄んだ音色は、この礼拝堂にあるあらゆる物より純粹で、ただただ美しかった。

どうしてこんなことになってしまったのだろうか、少年は後悔した。

こうなってしまったのは自分の所為なのだろうかと、少女は懺悔した。

この地に足をつけた瞬間からの、一切全てを懺悔した。

己という存在が生まれてからの、一切全てを後悔した。

彼等の胸中を占めるのは、負の感情ばかりだった。

そして、一際甲高い音が礼拝堂で残響する。

彼等は剣舞を止めて、共に背後へ距離をとった。本来の彼等には必要もないが、二人は剣の柄の感触を確かめている。

ふと、押し殺すような声。

少年は、問い掛ける。

「どうして……？」

それは疑問。

少女は答えない。

「……………」
それは、無言。

力無く剣を振り上げ、少女は少年に向かって駆け出した。少年も、それに合わせて前へ走る。

少年は叫ぶ。

「どうして……………っ!!」

それは懐古。

少女は叫ばない。

「……………」
それは、沈黙。

そして、剣と剣が交差する。

火花の散る代わりに、互いの剣が互いの剣を。

あるう事か、両断する。

半ばから切断された刀身が、それぞれの背後に斬り飛ばされた。

少年と少女は先程のように　しかし僅かな距離を、後ろに下がった。

片方は別れを告げる。

「……………これで、終わりにしよう」

それは、叫声。

それは、思案。

「……………」
「あ」

もう片方は　答えない。

握り締めている剣は、不思議なことについての間にか元通りの状態

でそこにある。

刹那、互いが互いの胸の中心に向かって、切っ先を突き出した。
そして

相手の耳元に顔を近づけ、寄り添い合うように身を重ねた状態で俯いたまま、顔を上げることもできない。

足元に落ちた影を見れば、剣は互いの胸を貫いていた。

少年には、手の中で失われていく体温が、いったい誰のものなのかすら分からなかった。

しかし今にも消えそうな温もりだけは、命の灯火だけは、間違えようも無い本物だと分かっていた。

少女は呟く。

「……貴方のことが 好きだった」

自分が人を殺したのか、自分が人に殺されたのかも分からないまま、彼等はどちらからでもなく涙を流していた。少女は、片目から涙を零した。

それは紛れも無い、夢でもない

少年は呟く。

「ああ、これが」

「 全部、現実なら良かったのに」

第一章 『Curtain call』 1 (前書き)

3月6日、編集・見直しのしやすさ改善のため、第一章を分割しました。

どうもお久しぶりです。ついにジョブをゲットして俺たちの戦いはこれからだぜ！ エンドを迎えそうな工人です。

忙しくてロクに書く暇もないですが、今回は第一章を投稿です。大復活です。

どこかで見たとような話になってしまっただけで怖いんですが、これから次の章を投稿する度にだいたいぶ改正、推敲、書き直し入ると思うので平にご容赦ください。

あと、作者自身が「言いたいことを言っただけが悪い？」なヤな奴なので、参考にできそうなモノなら遠慮なく批評なんか頂けたら狂喜乱舞します。何卒、よろしくお願いいたします。

第一章 『Curtain call』 1

『Day dream』

夢。

夢を見ていた。

いつから続いている、いつまで続くのかも分からない夢。

夢であると確信できるのに、現実かもしれないと思わせてしまう。

そんな、夢。

そこにはアイツらがいて。いるはずのないアイツもいて。

あまり知らない彼もいて。

そしてそこには、見覚えすらない彼女がいた。

……妙な夢だった。

真っ白な空間。

そこには、知った人間がたくさんいる。

「……気持ち悪い」

しかし皆、霧のようなものがかかってハッキリとした顔が分からない。

輪郭が、ぼやけている。

「……あれ？」

その中に一人、まるで見覚えのない少女がいた。
いったい誰だろう。

その一人だけ、この空間で存在が浮いてしまっている。

その少女は、頭に包帯を巻いていた。右目を覆うように、そのセピア色の長髪に何度も、何度も斜めに巻き付けてある。

ふと、その少女の視線がこちらに向いた。
目が合う。

その瞬間、何かを感じて身体が動かなくなっていた。
自分でもどうなっているのか分からないが、一つしかない眼と視線が合うという不可思議な事態が発生している。

僕にはちゃんと眼が二つあるというのに。その二つが、たった一つの硝子玉に吸い込まれていく。
やがて少女は言葉を発した。

「……………」
上手く聞き取れなかった筈だけど、何故か僕には冬の雪風に酷く似た声だと感じられた。

けれどやはり、声は遠く離れているかのようにかすれて聞き取れない。

焦燥感。

やりたくないけどやらなくちゃいけない事が、間近に迫っている感じ。

少女の声は、少し大きくなって再び響いてくる。

他の人影は、未だシルエツトのまま周囲を揺蕩たゆたっている。

離れて見つめ合うような距離。身体感覚がない不快感から彼女を見ていると、言いようのない懐かしさにも似た感情を覚えた。

見覚えなんてある筈もないのに、そんな感触がある。

まるで、身体の一部のような。

あたかも、血を分けた家族のような。

その時、一際大きな音が耳朶の奥まで刻まれた。

大きな、それこそ耳に届くまでの距離を縮めるかのような音。

声が姿にようやく追いついたかの如く、ハッキリと聞こえる輪郭のついた声で。

『 やっと、見つけた。貴方が……私の……』

「……………え？」

聞き返したのは、聞こえづらさからではない。
意味が分からない。

僕にはその言葉の意味が理解できなかったのだ。

質問は許されないことだったのだろうか、急に無言になる少女。
それに対して訝しげに声をかけてみる。

「あの、君は……………」

誰、と聞く筈だった。

ここが夢の中であることなど、半ば忘れていた。

だが、僕の言葉を無視して少女は不意に顔を上げると、再び唐突に口を開く。

『 Remember . 1 / 1 2 0 0 0 0 0 0 0 』

リメンバー？

英語？

意味は……………なんだっけ？

思わず口に出してしまう。

「……………一億二千万分の……………」

しかしそれは間違いで、同時に正解でもあった。

呟いた瞬間、色彩が反転する。

なにが、ではない。

なにもかも全て。

少女と、人影と、白い背景。

他には……………ない。それだけだったらしい。

「なんだ……………これ？」

真っ黒な闇に、白い人型の霧。そして……………。

世界が反転しているのか、視界が反転しているのか。

やがて明滅、眩暈が襲ってくる。

予感がある。

胸には、予感がある。

きつとこれは夢だ。

だから目覚めれば忘れてしまう。

だけど、言いようのない感覚だけは本物で、僕が見る夢は、きつと現実を予見する。

ああ、意識が遠のいてきた。

闇に溶けて、

泥に沈み、

眠気が。

……意識が途切れる

いや、終わる寸前。

僕の夢は告げていた。

始まる、と。

ああ、そういえば忘れてた。僕の身体は、どうなっていたんだろ
う。

ぼやけていたのかな？

それとも。

……やがて、ゆっくりと意識を失い。

視界が、暗転した。

『幕間・闇』

ここではなく、今でもないどこか。
誰かが、呟いた。

「 蝶が私なのか、私が蝶なのか。」

夢を見ているのはどちらで、夢に出てくるのはどちらで、夢みが
ちなのは？

私／蝶は、本当に蝶／私なのか？」

』
black out
『

第一章 『Curtain call』 1 (後書き)

超展開に構成力が追いついてないな……。
精進。

第一章 『Curtain call』 2 (前書き)

3月6日、編集・見直しのしやすさ改善のため、第一章を分割しました。

喜怒哀楽、四苦八苦はただ己が内にのみ。

『Sleeping beauty』

人間が眠るのは身体を休める為らしいが、個人的な理由として言うのなら、僕が眠る主な理由は、昔から『夢を見たい』という願望が大きな部分を占めていた。

だって夢は素晴らしい。

価値観とは、自分も他人も苦しめるモノ。

なのに夢では、誰が何を好み嫌うとしても、誰も何も苦しめないのだから。

虚しいと言われれば、否定は出来ないかもしれないけど。

「う……あ」

……うつ伏せのまま目覚めると同時、この度の起床が実に悪質なものであることに眉を顰める。

まず目が覚めると、土の感触を感じた。それも一箇所からではない。いや、ある意味では一箇所でも間違いではないようだ。なぜなら、

「………苦い」

口の中がジャリジャリする。まるで砂を噛んでるみたいに。俯いて倒れていた僕は、肌を削るような砂の感触を全身で楽しんでいた。

……嘘。気持ち悪いだけで、一向に楽しくなんてなかった。

近くから水が流れるような音が耳に届く。

ゆつくりと開いた目に映るのは、公園のような風景。ただし十数メートル程の距離には林があり、すぐ近くまでしか見通せない。

しかも空は曇っているのか、爽やかさの欠けた景色だ。……九十度横倒しになっていることを差し引いたとしても。

ここは……どこだ？

考えていても仕方がない。身を起こして状況を確認しようと決める。

「っ……よいしょ」

ちよつと年寄りくさい。

やはり目の前にあるのは林だ。葉が青々と繁っている……訳でもない。枯木みただ。

「どうして僕は、こんな所に……？」

記憶を探る為に、意識を過去へと逆行させる。

僕の名前は、『永久宮逝人』。縁起悪い名前とよく言われるが、僕も同意。

十六歳。清祥高校二年生。七月七日の七夕生まれ。

家族構成。両親は幼い頃に他界。しばらく嘆き悲しんではいたが、今は立ち直って学生寮で一人暮らし。

兄弟姉妹は……いない筈だが、よく母さんが『貴方にはね、生き別れのお姉さんもいるのよ。それでね、逝人が大人になったら……』

二人は互いの真実を知らぬまま、恋に落ちちゃうのよ！』なんて巫山戯て言っていた気がする。

まだ十歳にもならない子供を相手に。

とんでもねー母親である。

が、あのお気楽家族に限って、肉親と生き別れする原因なんてつくれる筈がないので却下。

……好きな言葉は五・七・五。嫌いな言葉は三行半。だからといって特にどうという訳でもない。

好きな食べ物はコンニャク。嫌いな食べ物は糸コンニャク。これ

を言つと大抵の相手には『お前の考えてることはよく分からない』
と言われる。

エトセトラ、エトセトラ。

意識を失う直前までの記憶を探る。

いつも通り、学校に行つて帰つてきた筈……？

いや……おかしい。

それは普段の話だ。最後の瞬間の記憶じゃない。

そこで僕はようやく気付いた。

ない。

ここに倒れ伏すまでの整然とした記憶が、ない。

思考を過ぎるのは、脳に強い衝撃を受けた人間が、その前後の記憶を失うとかいう話。

おいおい、僕は誰かに撲殺未遂でもされたつてののか？

「……分からない。覚えてない事を考えても仕方ないし、今はまだ

—

思索に疲れ、何気なく周囲を確認しようとした。

視界を振り返らせた僕の目には、水音の源たる風景が映る。

鏡のような、大きな池。湖と言われれば湖のようにも見えるが、

池と湖の違いなんて僕はよく知らない。

『多分大きさの違いなんだろう』と、本当の湖の大きさのことを全く知らない僕は、問の抜けたことを考えていた。

さて、水音の正体は分かった。

だが僕の眼は、そんな背景に意識を割くことを許さなかった。

何体も辺りに散らかされた、手と足と頭が生えた生き物。

おそらく二本足で歩行していたと推測されるそれらは、紛れも無い人間達だった。

「え……ちよつと……！？」

すぐ後ろに広がるこの光景に、なぜ今まで気付かなかつた！？

目についたそれ つまるところ、近くにある人間に駆け寄る。

「死ん……でる？」

パニックになりかけた思考を何とか押さえ付けて、よく観察しようとする。

「……落ち着け、僕は死んでない。倒れてる人達が死んでるなら、僕も一緒に死んでいた方が自然なんだから……」

ここで『まだ死んでるかどうかなんて分からないじゃないか……』なんて考えてしまうと、その通りの現実に遭遇した時に致命的だ。冷静な思考を保てない。

……幸い、感情の制御には慣れている。そうでなくても元々感情の機微に乏しい性格だ。数秒の後には、目の彼の生死を確認できるくらいには落ち着いていた。

首筋に手を当て、脈の確認を敢行する。

こんなに大勢の人間が倒れ伏しているなんて、有毒ガスでもバラ撒かれたんじゃないか……。

それこそ、冗談じみているか。

さて、生きているなら、脈がある筈だけど……

「うおわっ!」

予想外に感じ取ってしまったのは、人の持つ温もりと浅い呼吸による喉の上下。

肝心の脈どころではなく、もっと分かりやすい『生きている証』を直に確かめてしまった。

「……なん、だ……?」

その時、叫び声を聞いてだろうか、僕が脈を計っていた“彼”が目を覚ました。

「ん?」

疑問の声は僕から。

感じたのは違和感。

慌てていたのか今まで気づかなかったが、同い年くらいのこの少年に、僕は見覚えがある気がする。

掻き上げた短髪、精悍ともいえる男らしい顔つき、青色を想起させる正義の信奉者。

「……ここは……？」

目覚めるなり先程の僕のように辺りを見回している彼の名は

「西園？ 西園にしその、伸一しんいち？」

「あれ……ユキトか？」

何時なのか、時間も分からない今この瞬間 僕はここ数年来の

親友と再会したのだった。

彼は正義を何より重要視する素晴らしい人物で、きっと現状への対策に役に立つてくれるだろう。

「昨日会ったばかりか？ 懐かしむ程の久し振りではないんだが

お前、なんでこんな所に……いやそれ以前に、ここはいつたいどこなんだ？」

ふむ、彼も知らないか。

「僕こそ悪いね……君が分からないんだったらお手上げなんだ」

「はあ？ なんだそりゃ？」

「目を覚まして、『あれ、倒れてる？』と思ったらここにいたんだよ。で、最初に目に入ったのが西園君って訳」

やれやれ、なんて首を竦めて見せると、西園は辺りを見回してこう言った。

「取り敢えず、全員を起こして回ろう。それから、話を聞いてみないと。なんでこんなしょうもない所で倒れてたのか、確かめようぜ」

人々が倒れているのに混乱も動揺も晒さない。落ち着き払って僕に的確な指示を出す。しかし決して、冷酷な訳ではなく。

「分かった」

やっぱり頼りになる。このイケメンは、悪に義憤し正義に生きる好漢だ。なぜか昔から男には嫌われやすかったみたいだけど。

性格が災いしてかよく不良連中に絡まれていたが、剣道少年だった彼はことごとく撃退していた。実家が古流剣術の一門らしく、無手でも喧嘩慣れた連中を蹴散らす程には強い。少なくとも僕とは、潜ってきた修羅場が違う。

いかなれば、襲い掛かるモンスターを倒していく内に、魔王と戦える位までレベルが上がった勇者様。

生まれながらの主人公体質。性格の上でも尊敬できる男だ。

なぜそんな男と僕みたい人間が親友なのかという話なのだが…

…。

「池の周りに沿って行こう。俺は右回り、お前は左回りだ。向こう側で落ち合おう」

意識を引き戻される。

「ああ、分かった。ところで、ずっと気になってたんだけど……」

「ん？ なんだ？」

それは、自分一人では解決できなかった疑問。すごくどうでもいいといえばどうでもいいのだが、なぜか気になって仕方なかった。

「西園君が着てるその制服……ウチの学校のじゃないよな？」

黒い生地には金と銀の糸で刺繍が施された制服は、お世辞にもまっとうな服には見えなかった。どこぞの王侯貴族かお坊ちゃまがミッシヨン系の学院に通っていても、絶対に着ないだろうと思える服。

校章のようなものが襟に付いているので制服だと分かったが、その見覚えのない意匠は間違いなく普段目にする物とは違う。

ちなみに、ウチの高校である清祥学院の制服は学ラン。

僕がその高校を選んだ理由でもある。だって大人になったら学ランなんてもう着れないから。

その理由を聞くと、大抵の相手には笑われた。

元々他人の評価を気にしない傾向にある僕には、どうでもいい話ではあったが。

見た瞬間に彼が西園君だと分からなかったのは、この制服の違和感の所為で普段と印象が大きく変わっていたからという理由もある。

「ああ、いつの間に着替えさせられたのか分からないけどな。っていつか、お前もだぞ？」

「……えっ？」

急ぎ湖面に自分の姿を映し見ると、そこに映っていたのは彼と同

じ制服を着込み、わりと頻繁に特徴的と評される灰色の髪を伸ばした男子高校生　つまるところの僕が、そこにはいた。

「ホントだ……」

気付かなかったが、僕も同じ制服を着せられている。

「俺達だけじゃねえぞ。……見てみる、辺りで倒れてる奴ら全員だ」言葉に従い見回せば……確かにその通り、皆が皆同じように制服を着ていた。女子用のスカートを穿いた姿も見えたので、倒れているのは男女平等ということらしい。

「ほら、急ぐぞ！」

「ああ、うん」

走り去る西園君。

僕は再び池の水面へと視線を落とす。

「……やっぱり。なんなんだ、これ……」

僕は気付いていた。おかしな格好には、もう一つ見慣れない物があつたことに。

首に巻かれたそれは、制服と同じく自らの意思で付けた物ではない。

だが。

逆にその事実が、この上なく空恐ろしい。

なぜなら、それは

「なんなんだよ、この“首輪”は　？」

どうやって外れる筈がない。

なぜなら、その首輪にはおかしなことに継ぎ目がなく、よって外すには切断するしかないからだ。

ハサミすらないのに、これを外すのは難しい。触った感じでは、だいぶ頑丈だな、と呑気にもそう思った。

それから僕は、自分の役目を果たすべく動き始めた。

彼と別れてしばらくしてから、やっと僕は池の周りを左回りに歩きはじめる。

だが、歩き始めたその時。

白黒の世界で、一際目立つ原色のような。

僕は何かを感じ、後ろを振り向く。

「なんだろう、この感触……」意識の外にあった何か、急に意識の中に入り込んできたような異物感。人が一生を終えるまでに感じるような、普通の感覚じゃない。

第六感が察知したというよりは、第六感そのものに直接接触れられて感じているような。

西園君を呼ぼうとも考えたが、既にだいぶ離れていて、どこにいるのか分からない。

仕方なく一人で辺りを見回し、ようやくその原因を 見つけた。僕と程近い場所に倒れていた人影。

ブレザーともセーラーともつかない制服。黒に貴金属の色が飾り付けられた意匠。

それは美しく、可愛らしい少女。

今、この瞬間の出会いが、運命による必然であると錯覚させるかのような。

見た人間全てが、そう思い込みたくなるような。

歳は僕と同じくらいだろうか。長い髪は人目を引くセピア色。白磁器のような白い肌。顔立ちは整っていて……色気もない話だが、自分の身内にいればそれだけで自慢になるような いわば美少女だった。

そしてその中で一際異彩を放つ要素がある。

眼帯。

正確に言うなら、包帯が頭に巻き付けられている。

真っ白な包帯が、右目を押さえ付けるように何度も、始めはきつちりと 見た目も考慮しているのかと考えるとしまう程に時には緩く。

眼帯という表現はあまり相応しくなかったか。顔にはかからないように巻いてあったのだから。

髪を撫で付けるような、優しさも感じさせる巻かれ方だ。

「……あ、駄目だ」

ふと自己嫌悪に陥る。

思わず見蕩れてしまったが、初対面の人、しかも意識のない女の子をジロジロ眺め回すなんて失礼だ。品がないにも程がある。

……よし、取り敢えず起こそう。

「あの……大丈夫ですか？」

声をかけただけでは目覚めないんじゃないかと思っていた。

どうせ肩を揺らすことになって、目を覚ました彼女からあらぬ誤解をされることになるのがいつものオチだろうな、なんて。

だと、いうのに。

「ふあ……う……ん」

彼女は、目覚めてしまった。

本来なら目覚めは喜ばしいことだし、事実として生存は嬉しい現実ではあった。しかし、これは逆に不安になる。

事件に巻き込まれているのだから事件を巻き起こしているのだから分からない程の頻発性迷惑体質こと永久宮逝人クンとしては、非常に。

手始めに彼女は目を開き、上体を起こすと可愛らしく伸び。次に口に手を当てて欠伸をする。涙を指で擦ると……ここで初めて、横で片膝をついている僕に気付く。

寝ぼけているのか、小首を傾げ小鳥のように可愛らしい声で一言。

「お兄……ちゃん……？」

「はい！……あ、いや、違うからして」

残念ながら僕に妹はいないのだった。

思わずハイと言ってしまったが、別に妹が欲しいからという訳ではない。ただの反射である。……本当ですよ？

少女は少しポケットとしたまま辺りへと視線を巡らせ、自分を見回した後、再び僕へと視線を戻した。

……じつと見つめ合う。

ふっ、と眼が揺らいだかと思うと、頬を朱に染めて慌てたように

顔を逸らした。

お兄さんと見知らぬ男を間違えて、恥ずかしかつたのだろう。むしろ恥ずかしい出会い方に顔が朱いのは僕の方なのだけれど、この慌て様では気付いていないかもしれない。

……この心の声を彼女の兄に聞かれたら、「お前にお兄さんと呼ばれる筋合いはない！」とか言われそう。可愛い妹を持つ兄貴は、必然的に過敏にならざるを得ないのだろうな……。

いや。やめろ、馴れ馴れしいぞ僕。

そんな下らない想像をしていた僕に彼女は顔を伏せ、あるうことが謝罪をしてきた。落ち着いていて、大人びた冷静な声だった。

……声だけ、だが。

纏う雰囲気は微かに機械的で真面目そのもの。一種、人形のような無機質ささえ孕んでいるようだった。

「ごめんなさい……間違えました。……私は……マナ、といいます」
少女は、自らの名前をマナと名乗る。何かを考え、確かめるような間を挟んで。

「あ、どうもご丁寧に……」

いやいや、何を言っただ僕は。

「初めまして、永久宮逝人です」

「そう、そうでしたか……。では……ユキトさん、とお呼びしても？」

「どうぞご自由に」

何か彼女は、僕の言葉に思う所でもあるのだろうか？ さっきからマナさんは、一言毎に何か考え込んでいるような……。

うん、思いつがらだ。

「早速ですがユキトさん、現状を教えてくださいますか？ 何しろ、何故このような場所に倒れていたのか記憶にありませんので」

「ああ、はい……とは言っても、まだ他にいる倒れていた人達を起こしている最中なので。僕には倒れた瞬間の記憶もないので、なんともいえませんね……」

協力できないのは口惜しいが、皆から話を聞かない限りはなんとも言えない。

申し訳ないが、彼女の安心は僕からは手に入りそうにない。

「そうでしたか……でしたら、手分けして皆さんを起こしていきましよう」

なのにこの状況で手伝いを申し出てくれる彼女の、なんと優しいことか。

「ええ、友人が池の反対側を回ってますから、僕達はこちら側を回っていきましょう」

「分かりました」

そうして僕とマナさんは、西園君に合流すべく倒れた人達を起し始めるのだった。

彼女の首にも、まるで思い出のようなセピア色の、見覚えのある首輪が佇んでいた。

第一章 『Curtain call』 3 (前書き)

3月6日、編集・見直しのしやすさ改善のため、第一章を分割しました。

『円卓会議』

「おい、ユキト！」

「西園君！」

結局、少し遅れて行動を始めたにも関わらず、僕と西園君の通った距離は同じくらいだった。マナさんという協力的な仲間がいたおかげだ。にも関わらず、僕達が起こすなり勝手に勝手にどこかへ行ってしまった人達も数人いる。

まあ、他人の自由意思は尊重する、というのが僕のモットーなのだけれど。

合流した僕達の周りには、二十人近い人間がいる。ここに来るまでに起こしてきた人達で、西園君と別れてから五十分位は経っていると思う。腕時計は携帯があるから着けてないし、その携帯はどこにも見当たらない。着替えた服ごと持って行かれたのかもしれないし、そもそも意識を失う寸前の記憶がないので身に着けていたのかも定かではない。

有るのはこの趣味の悪い、学ランとかブレザーとかセーラーとかの分類が難しそうな制服と、見た限りでは全員が身に着けた色違いの首輪だけ。

倒れていた人達は、皆が皆高校生くらいの年齢のようだ。

ちなみに西園君の首輪を確認したら、群青色よりやや明るいブルーだった。なぜか着けている人間のイメージに合わせてあるらしい。一人として、同じ色は見当たらなかった。

「あー、すいませーん！ 現状把握の為に話し合いをしたいので集

「まっけて頂けますかー？」

そんなこんなで発せられた西園君の一言で、僕達は輪のような形になる。流石に初対面の相手には、西園君も丁寧な口調になる。時と場所と場合を弁えられる高性能好青年である。……言いにくいな結構すごい統率力……というか発言力だ。生徒会長レベルか？

……基準が分からない例え方しちや駄目か。

ちなみに西園君の左隣りが僕で、更に僕の左隣りにはマナさんがいる。

僕は西園君に続けて口を開く。

「まず聞きたいのは、ここで倒れていた理由……ですが、心当たりのある方はいらっしゃいますか？」

そう質問をした瞬間、暗く重苦しい雰囲気の流れはじめる。息苦しさまでは感じないが、それだけで分かってしまった。

ああ、誰も知らないんだな と。

「ということとは、この制服も首輪も、着けられた理由を知る人間はいない……ですね？」

やはり。他に重要な問題はあと二つか三つほどだ。

右隣にいる西園君の方を見ると、視線が交わった後に頷いてくれた。

僕のアイコンタクトを受けて、今度は西園君が喋り始める。長い付き合いだと、いつの間にかこれくらいは出来るようになっていた。「今のは一番大事な問題ですが、それ故に最後に回しておきましょう。続いて、この場所がどこかという問題ですが……」

この質問、さっきの質問に答えられる人がいない以上は、この問題にも答えられるとは思えない。

眼が覚めたら見知らぬ場所だ、っていうのが今の状況なのだろう。まだ振り出しのままか。

少なくとも、僕も西園君もそう思っていた。

「あのお……」

手を挙げたのは見知らぬ少女。いや、さっき僕が起こした人間の

中にいた少女だ。恐慌状態にもならず、錯乱もせず優雅な物腰で僕の話聞いてくれて、すぐ助かった子なので覚えている。ただしどう見ても僕よりずっと年下だ。絶対。名前すら尋ねていないのだけれど。

薄い赤紫マゼンタの首輪をはめた、小動物系のお嬢様、といった感じ。

「どうしましたか？」

まさかとは思うが聞いてみたい。皆が集中している雰囲気。息を呑む音まで聞こえてくる始末。

「はい……ここって、御旗市みはたの堂森公園どうもりではありませんか？」

その一言で、周囲の空気は凍り付いた。

マズイ事を言った訳ではない。とんでもない事を言っただけだ。

御旗市。日本海側にやや近い内陸の街。とある県にある田舎の地方都市だ。

僕が知らない筈がない。西園だつて知らない筈がない。

自分が生まれ育つて住んでいる街を、知らない筈がないじゃないか！

堂森公園といえは清祥高校の近くにあつて、更に近くには墓地があり、人気ひとけがないことで有名な公園。

そもそも僕だつて、両親の墓参りの帰り道に年に一度はここを通る。

「……なんで気付かなかつたんだ」

まるでバカみたいなことを考えていたつてことじゃないか……。

「私わたくし、よくお家を抜け出してはここに来て本を読んでいるんです。

だから、またうっかり本を読んでいる最中に眠くなってしまったのかと思っていたんですけれど、そしたら……」 変な格好の集団がおおわらわしてた訳か。

つまり僕達。

「……と、いうことはもしかして……」

場の空気が凍り付いたということは、おそらくは……。

「え、えーと、この中で『御旗市に在住』の方はお手元のスイッチ

を押してください……なんて」

思わず場を茶化す方向に行ってしまったが、結論から言えば予想通りだった。

視界いっぱい広がる光景では、僕の悪ふざけを無視して、全員が全員……

手を、挙げていた。

これで、一つ分かったことがある。

「今回の件は、この街 御旗市に住んでいる学生達が、服を着替えさせられた状態で市内の公園に倒れていたってことだ……」

意図せずして口調が戻ってしまった西園君が呟く。

頷く僕。

全員がとりあえず家に帰って確かめ、安心したいと考えているのだろう。

中でも特に、少女達の不安は見取れる程。知らない内に着替えさせられていたら、肌を見られた可能性もある訳で……。犯人は女性かもしれないが、もし男だったら許しがたい。西園君辺りなら、警察に突き出す前に犯人をボコボコにしてしまうかも。

そう考えていた矢先に、気になる発言があった。

「ねえ、一つ聞いても良いかしら」

冷淡とさえいえるその声は、信じ難いことに僕の左側から聞こえてきた。

確かに冷たい声の持ち主でこそあったけれど、そこまで問い詰めるような雰囲気は持っていなかったと記憶していたのに。

マナ。

苗字も分からない少女。

さっき僕と話していた時とは、まるで別人じゃないか……。

「……何かな？」

あの西園君でさえ及び腰で話し掛けている。そんな現実が信じられない。無様な姿を晒すな、西園伸一！！……冗句だけど。

「……皆、誰も意識を失う寸前の事は何も覚えていないの？」

それは最初の疑問だった。誰も答えられない、最大の謎。きっとこの服の謎もそこにある筈だ。

しかしそれが間違いだつたと気づくのは、そう考えた直後のことであつた。

それは返答だつたのかさえ分らない……というよりは、人の輪の至る所から声が届いてくる。

いわく。

そんなこと言われても、急に意識を失つて

……。

それは、つまり。

僕だけが、その寸前の記憶がない……？

マナさんは、皆に記憶があることに気付いていたのか……。

いや、違う……逆だ。僕にその時の記憶がないとは、思いもよらなかつたんだ。

いやいや待て待て、さつきそれについては……。何も言い出すことのできないままに、人の輪は崩れ去ろうとしている。

隣にいるマナさんは、なぜか沈痛な表情で俯いている。理解できない。

色々な情報が錯綜して、僕の理解が及ばない。思考が追いつかない。

と、いつの間にかマナさんがこちらを見ていた。

「ユキトさん……どうしましょうか？」

「ど、どうしましょうって……何が？」

脈絡のない会話に、思わずどもりながら聞き返す筈。

「皆さん思い思いにどこかへ行こうとしてますが……」

「ああ、君もこの街に住んでるのかな？ なにか不安があるなら、僕が家まで送ろうか？ なんなら、西園君に頼んでも……」

下心からではない。そもそも僕も西園君も色恋事には興味が薄く、周囲にも変なヤツ扱いされてた人種だ。

……純粹に、恐かったただけだ。

無意識に怯えていた。

自分だけが抱える、記憶の不協和音……今の“永久宮逝人”を形作る歯車が、軋む音に。

「それが……そのですね……」

しかし彼女は言い淀み、続く言葉で僕を吃驚させた。

「家を……覚えてないんです」

彼女がこの公園を知らない可能性を考慮して。

「あ、どこにあるのか分からなくなっただんですかね？」 多分そう
だ。この公園、目印にするには地味過ぎるからな……。

一緒に探せばいいのだろうな。

「じゃあ、やっぱ僕が家まで送り届けるよ」

「……良いんですか？」

平坦で無表情な眉をやや斜めに下げ、少し俯く。

そんな申し訳なさげな顔をされたら、はいさよならと放り出した
りするのはもって不可能。少なくとも、西園君みたいな人には。

「約束しますとも、絶対に」

「……はい、よろしくお願いします」

そんなことを考えた後に、僕はそう言って、近くにいますであろう
西園君を探し始める。

そして。

彼女との約束が果たされないものであると、僕はすぐに思い知ら
される羽目になったのだ。

僕は、あの緋い液体と濁った瞳を、生涯忘れることはないだろう。
忘れることなんか、できやしないのだから。

第一章 『Curtain call』 4 (前書き)

3月6日、編集・見直しのしやすさ改善のため、第一章を分割しました。

弾けて消える夢ならば。くるくる回り、くるくる回れ。

『人の結末、人は泡沫』

「キヤアアアアッ！！」

西園君を捜し始めた僕達の耳に届いたのは、背後から響く女性の甲高い悲鳴だった。

続けざまに男の叫び声も交えつつ、周囲の人達を巻き込みながらいや、むしろ媒体としながら伝わってくる激しい動揺の気配。

それは唐突な狂乱だった。混乱でもあり、錯乱でもあった。突き付けられたのは壊れかけの現実。

思わず振り向いて視線を向ける。それぞれに散りかけていた人々を恐怖と狂騒の渦に引き込んだのは、僕達と同じく高校生程度の男達だった。

僕達の周囲を囲うその数は、見た限りでは十人以上。その誰もが、僕達と同じ制服と首輪を着けている。だというのに、その顔にはまるで見覚えがない。

つまり必然的に、彼らは僕等と同じ境遇の人達ということになる。なるはず、なのに。

悲鳴の原因は、間違いなくこの闖入者達だ。それ以外の可能性なんて、パニックになった頭では導き出せない。

だから脳の処理が追いつかない。視覚からの情報を、僕の頭は認

識しきれない。

「な……嘘だろ……？」

見えたのは、光を凶悪に弾き返す銀色。

持ち主の目つきのようにギラつく切っ先。

赤く濡れた、鉄の塊。

紅くて鋭い、鋼の刃。

奴らの手に握られた日本刀は、間違いなく人を切り捨てている

!!!

倒れ伏した男が一人……二人、三人程。

そして今、無造作に振るわれた刀が四人目の犠牲者を生み出し、同時に四つ目の死体を生み出した。

撫でるように抵抗なく振り抜かれた刀身が、逃げる男の背後から襲い掛かり、肩口から反対側の脇腹までを袈裟に突き抜ける。

ずるり。

キモチワルイおとがして、

にげるそのいきおいのままに、

ひとがひとりくずれおちた。

「……………は？」

なんだ、これは。

なんだよ、これ……。

「う……あ、ああ……っ」

僕には、たった今日の前で起きた事が信じられなかった。

信じられる訳がない。

信じられたらおかしい。

信じなくてもいいんじゃないか？

信じたくない。

信じない……いや現実を見る、それだけは駄目だ !

「……嘘、だろ？」

それでも、僕の思考は固まっていた。身体中の血液が、戦慄によって凍り付いてしまったのか。自分の指先から血の気を感じない。

動かそうとしても動かない。そもそも、動いていても麻痺した感覚の所為で感じとれていない。

人、が、死んだ。

目の前で。

人、に、殺された。

有り得ない。刀で人間を真つ二つにするなんて……

「こつちです、ユキト!!」

「ッ!?!」

不意に手を引かれて硬直が解けた。引かれるそのままに横へ倒れ込む僕。

その手を引いた誰かに抱き留められた瞬間、たった今まで僕がいた空間へ、刃が縦に振り下ろされる。

間一髪、紙一重。

斬、と地面を切りつける音。

刀を振るった男はこちらへ向き直ると同時に、今度は横薙ぎに刀身を構え……吹っ飛んで行った。

「行け、ユキト! 生きてるヤツを連れてここから逃げる!」

「西園君!」

敵を蹴り飛ばしたのは、さっきまで僕等が探していた筈の西園君だった。おそらくは、今の今まで連中と応戦していたのか。

無駄な問答をするほどの時間はない。頷いて、素直に従って生存者を探す。

「行きましょう、ユキト!」

僕を呼ぶのは、たった今さっき手を引いて、僕を受け止めてくれた人物。命の恩人。

僕のすぐ隣にいた、マナだった。

「あ、ありがとう」

くっ、どうして今まで彼女が意識の外に出ていた? 彼女を優先して守ろうとできなかったんだ?

自己嫌悪しかない。

たかが五秒だって思考を止めることは許されなかった筈なのに！

二人で辺りを再確認すれば、そこに広がっていたのは地獄絵図だった。

阿鼻叫喚、戦場、虐殺。かろうじて見えたのは、ただ何も知らない人々が、暴力をもって蹂躪されていく光景。

目にした人間が膝を折ってこの世に絶望するのには、十分過ぎるであろう惨劇。

怒号と泣き叫ぶ声が響く公園で、耳に届く声がある。

リーダー格の男が連中に命令を出しているのだらう、酷く不愉快な嘲笑する声。この光景に響くその声は、生理的な不快感から殺してしまいたくなる程の

「ツクハハハハハハツ！！！！いいぞテメエら、殺せ、殺し尽くせつ！鼻や耳を削いでも皮を剥いでも手足を切り落としても構わねえ！！生きたまま捕まえて帰るぞ、男は奴隷だ！女は……言わなくても分かるよなあ！？テメエらの好きなヤツをくれてやる！だが誰一人逃すな、要らねえやつは好きなように殺せえつ！！！！！」

外道だった。こんな顔を人間が、それも、まだ十代程度の子供ができるとは思えない程に、深く刻まれた醜い外衆けすの嗤い方。

ここが本当に僕達の街だっていうのか？とてもじゃないが、別のよく似た街だって言われた方がまだ説得力がある。それ程までに非現実的な光景ばかりが目飛び込んでくる。

しかし怒りが沸かなかった。その余りの現実感のなさに、感情が麻痺したままだったのか。

それとも、僕の小さな感情の振れ幅が、余りの激情で振り切れてしまったのか。

そのお陰で、冷静に思考していられる。迷いなく、間違いなく、目の前の人を守る方法を求められる。

「っ　あああああっ！！！」

ああ、そうか。既に怒っていることを、自分が感じとれなくなっているだけだ。

叫び声なのかも分からない叫び声を上げて、勢いよく前方へ飛び込む。

僕の目の前で転んだ少女に襲い掛かる男を、駆け付ける勢いで蹴りつける　っ！！

「大丈夫ですか!？」

一拍遅れて駆け付けたマナが、少女を助け起こす。

「あ、ありがとうございます、永久宮さん、マナさん」

「君は……………えーっと……………」

名前が出てこないと思ったら、そもそも聞いてないんだった。

薄い赤紫マゼンタの首輪をしたちっこいお嬢様。さっきの人だ。

「とにかく、僕達について来てくれ!」

返事を待つ前に駆け出そうとする僕等。急がなければならない。

自分でも分からない何かが、手遅れになる前に…………。

しかしそんな思考は、一瞬で吹き飛ばされた。

正確にいうならば、僕が吹き飛ばされたのだ。

目の前にいつの間にか現れた、先のリーダー格の男によって。

「ああ? なにしてやがんだ、テメエ?」

始めに感じたのは、身体から意識だけが叩き出されるかと思う程の衝撃。

目にしたのは、信じられないほどの勢いで迫る足の爪先

蹴り、か!?

次いで襲い掛かる、腹の中心に鉄球をねじ込まれるような見えな
い力の感触。

そして

「があ……………っ!？」　そのままの勢いで蹴り飛ばされた。

僕は昔、『人を蹴って一メートル飛ばせば健脚、二メートル飛ばせば達人、三メートル飛ばしたら脚の化け物だ』という話を西園君から聞いたことがある。

それ以上は人間の限界を超えるか、もしくは別の力が働かない限りは無理だ、とも。

そんなことを考えた時には、僕は既に宙を舞っていた。

叩きつけられたのは後方の林。木の多く生えている中を凄まじい勢いでゴロゴロと転がって、その内の一本にぶつかってようやく止まる。

「痛っ……！！」

腹に当たった木を支点に、身体が“く”の字に折れ曲がる。

痛みを堪えて身体を反対側に転がして向くと、その男はこちらへ歩み寄って来ていた。

男の後ろには、信じられないようなものを目にして呆然とした顔でこちらを見る、マナとちっちゃい女の子が見える。

……そんな、馬鹿な。

あの場所からここまで、軽く十メートル以上ある。

この距離を、人間が蹴り飛ばした！？

そんな僕の驚愕を余所に、男は別の困惑を顔に浮かべていた。

「ああん？ 妙だな……なんで生きてやがんだ、テメエ？」

その男は、怪訝な顔つきで僕を見下ろしていた。今までの人生で一度も見たことのない、睥睨する視線。人が人を見下す目だった。確かに男の言葉通り、反射的に後ろへ跳んで衝撃を緩和していなければ、内臓ごと腹をプチ破られていてもおかしくはなかった。

現に、紙一重で身を躲す技術だけには定評のあった僕でさえ、おそらくは一番下の肋骨が左右とも砕け、内臓がとんでもないことになっている。

同じく、一方的にやられることにも定評がある僕ですら、自分で自分の負傷が把握しきれない。

それ程までの威力。

おかしい。

そもそも、固定された目標が相手でもないのでそんな力を片足、それも勢いをつけない生身の人の足で出せる筈がない。いや、的が

固定されていたとしても無理だ。

そしてこの男は、相手が自分から身を引いたことにも気づいていない。実力と威力が見合っていない？

鍛えて手に入れた威力じゃないのか？

蹴られる瞬間に感じた見えない感触はなんだ？

……分からない。

そんなことより、痛みが全身を苛んで、今にも意識が暗転しそう
だ……。

しかし目前の外道は、その暇さえ与えない。

「まあいい、コレでやりゃあ死ぬだろう。あばよ、“落ちて”

きてすぐに俺達に見つかった、テメエの不運に絶望しろ……ククク
ククク、クツハハハハハッ！！」

男は腰から刀を引き抜いて、嗤う。

その笑い声は。

重苦しく。

陰鬱で。

くらくらする。

今度は正面から振り下ろされる剣を、スローモーションのように
見つめて

「その人は、やらせないわ」

鳴り響いたのは、涼風のような声とと激しい金属同士の衝突音。
火花が閃光となり、視界は眩んで白熱した。

そこから僕の目に映し出されたのは、想像を絶する光景だった。

いつの間に……いや、どうして。

ゆっくり取り戻された視力によって 僕は、彼女の右手にそれ
が握られているのを見た。

“マナ”が、間に割って入っている。

何故？

いつの間に？

そして、どこから取り出した？

その手に握られた、人殺しの武器はなんなんだ

グランドイウス

!?

「……………っ」

瞳。

彼女の瞳孔は、近くで倒れ伏している死人のようになぜか見開き、不安を煽るように不気味で。

男を冷たい眼差しで睨みつけて、刀を剣で受け止めて。

かたな じふるき

どうして彼女は、僕を助けている……………？

「その……剣……………」

「私にも分からない、でも大丈夫。ユキトは下がっていて！」

思わず呟いた僕にそう叫ぶと、マナは両腕に力を込め 組み合

っていた刃を、力づくで押し返した。

「ぐ、おおおっ……………!?!」

たったのそれだけで、今度は男が吹き飛んだ。

さつき僕がいた方向に、僕よりも速く、僕よりも遠くへ。

池の中へ、砲弾のような速度で叩き込む。

なんとというか、その戦いは既に現実のものではなくて。

まるで、漫画かアニメでも見せられているようだ。

物理法則を上回る不可思議な現象。あの細腕から、あんな力は生

まれない。何も無い空間から、あんな武器は生まれない。

どこか熱で浮されたような非現実。

有機の世界を侵す、現実より有機質な幻像。

「大丈夫 これならいける ……!」

マナは宣言した。

いつの間にか呼び捨てにしていたことになって、僕は気づいていなかった。

それ以上に、目の前の少女に見惚れていた。

西園伸一に勝るとも劣らない、物語の主人公たる風格。

その凛々しく、伶俐な横顔に。

「あ、ありがとう……………」

口を突いたのはそんな言葉。言った後で後悔した。なんて無粋な

ことをしたんだろう、と。

一口同音、異口同音。誰もが口を揃えて言う筈だ。もう少しだけ、眺めていたかった。

……そんな、我が儘を。

ただその行動は間違いではなかった。

「ユキト、大丈夫ですか？」

お陰で、今は彼女の視線を向けてもらっている。彼女に心配を掛けてもらっている。

いや、掛けさせてしまっている。

……不謹慎さに自分に嫌気がさして、ふと我に返る。

そんな理性的な自分が、感情に浸れない自分が、堪らなく厭になった。

気を取り直して返事をする。

「ゴメン、ちよつと立てそうもない……骨折れた」

肋骨がバキボキと。

「……自分で分かるんですか？」

分からないでか。痛いんだって。

「……ええ、怪我には慣れてるので」

実は会話どころか呼吸すら辛いので、手短かにそう返しておいた。「肩を貸したら、立てますか？」

彼女がそう切り出してきたので、僕は素直に肩を借りた。

あのセピア色のグラディウスは、いつの間にか姿を消していた。

どこにやったのか尋ねてみると、「……分からない。どこからか現れたと思ったら、いつの間にか消えてしまっていて……もう出てこないの」とのこと。詳しく知れなかった非常識の力に、脱力して肩を落とす。

その所為で感じたマナの華奢な身体つきは、本来僕が寄り掛かって良いものではないと暗に言っているような気がしてならなかった。少女に触れている緊張と興奮よりも、申し訳なさと罪悪感が上回ってしまふ己の性格を悔やんだ。

……やっぱり、惚れっばいのか？

初めて会ったばかりの人に、ここまで馴れ馴れしい思考を垂れ流すようなお気楽人間だったか、僕は？

リーダー格が倒された事に驚いてか、それとも西園君に蹴散らされたか。

おそらくは両方だろう。辺りを見回せば、既にヤツらはいなくなっていた。

思った以上に被害は少ない。最初に奇襲を受けた数人以外は、西園君に触発されて上手く逃げ回り立ち回っていたらしく。

切り傷は目立つものの、生存者の中で一番の重傷は僕みただった。

皆は、敵を派手に吹き飛ばしたマナを注視している。その所為で、いかに変人と称される僕でさえ、居心地の悪さを感じていた。

他に対した感情がない辺り、やはり僕はろくでなしだが。すぐに現状に慣れてしまう性質は、ずっと昔から変わらない。彼女から一人前に助けってもらったりなんかしやがって、こんなこ

んなおぞましい人間の癖に。

さっきの外道の台詞が、いつまでも耳に籠こもっている。

『なんで生きてやがんだ、テメエ？』

本当に　　なんで僕は生きてるんだ。

自分勝手過ぎるだろう、お前。

いつか、いつか死のう。

自分でも分かる程に狂った思考をしながら、マナが置き去りにしてきた、ちっちゃいお嬢様の元へ戻る。

「だ、大丈夫ですか？ 永久宮さん、マナさん……！」

口に手を当て、こちらに叫ぶお嬢様。後で名前くらいは聞いておこう。いつまでも“お嬢様”ってのもなんだしな。

心配してくれている。ああ、本当に良い子だ。

身体を引きずり、マナに肩を借りながらもなんとか池の淵にいるお嬢様の方に歩いて行く。

………ん？

………待てよ。

………何か、妙な。

………引っ掛かりが

池の淵、だと？

「駄目だ、そこから離れる　ッ！！」
叫ぶと同時。

池に背を向けるお嬢様の背後から、派手な水しぶきが上がる。

「きゃっ！」

小さな少女の悲鳴を聞きながら、僕は駆け出す。
死への恐怖なんて取るに足らない。

視線は、名も知らぬ少女の肩を越えて背後へ。

少女に向かって、池から手を伸ばす、あの外道へ。

間に合え　っ！！

「クヒツ………クハハハハハッ！！」

「ぐっ………」

しかし思いも虚しく、少女の首に、男の腕が掛けられる。

マゼンタ赤紫の首輪を覆い隠すように。

肘の辺りで、首を絞めるように。

僕は怪我の痛みに、思わずして膝をつく。

頼むから、ちゃんと動けよ僕の身体　ッ！！

男は少女を人質にとり、池を背にして皆を寄せ付けないでいる。

半円状の人の輪が、奴を取り囲む。

「動くなよ、テメエら！！　コイツを殺されたくなければなあ！！」

既にマナは僕の横に駆け寄り、助け起こそうとしてくれていた。

「私が………考え無しの方向に飛ばしたりしなれば………」

「責めないでくれ、僕も同じなんだ………それより、彼女を………！」

どうすればいいんだ。

かろうじて救いがあるとすれば、奴が刀を持っていないこと。だが、そんな希望すら儂く崩れ去る。

「ッ!?」

男が腕を振るった次の瞬間には、既に先と変わらぬ刃が手の中にあつた。

間違いない、やはりこれは常識の範疇を超えた現象だ。

誰も彼もが奴に近づけずにいる。

……正直に言うなら、もはや打つ手が無い。王手チェックメイトをかけられてい

る。どうすることすら、できやしない。

僕は……なんて無力なんだ！

「《刀賊》バンディットを侮ったなあ、ああ？ クツククク……さあて、どうしてくれようか……まずは、俺をずぶ濡れにしてくれたその女に服でも脱いで貰おうか？ 嫌なら死ぬ。それも嫌ならコイツを殺す。そら、早くしろっ！」

完全な、手詰まり。

僕の視界の端で、西園君は呪詛を吐き続ける。

「くそ……くそ、くそ、くそ、クソ　っ!!」

僕の目線の先で、名も知らぬ小さな少女は唇を噛み、悔しさに涙を流す。

「　　っ、　　っ」

僕のすぐ横で、彼女は……マナは俯き、震え、手を握り絞める。

「……………」

彼女は強く強く、剣の柄を握る。自らの手の平を伝い流れる血液にすら、気を留めることもなく。

なんでこんな……こんな奴の為に、皆が苦しむんだ　!!

ゆっくりと、立ち上がる。

そう思った瞬間には、僕の口は暴走を始めていた。

そのまま一歩、前に。

「おい……お前」

「……………ああ？」

ピクリ、と男の眉が動く。

頼むよ。

「僕を」

今すぐに。

「殺せ」

頼むから。

「……………なに言ってるんだ、お前？」

男は馬鹿でも見るような眼で、一步前に進み出た僕をみる。

そつだ馬鹿なんだよ。こんな状況になるまで何も出来ずに、こんな状況になっても何も出来ずに。

「もつうんざりなんだよ。こんなバカみげんじつたいな茶番に付き合わされるのはさ」

返事を聞く必要はない。初めからそのつもりもない。

一方的に、言いたいことをまくし立てる。

「なんだよ人殺しとか変な能力とか恥ずかしい。中学二年生じゃねえんだぞ、いい加減にしろってんだよ」

これが現実だというのなら、誰でもいいからその根拠を教えてください。

それよりも先に、その君の主張と君の存在自体が現実であることを、僕に証明できるのなら。

「なあ、教えてくれよ。これは現実か？ 夢か？ いつになったら目え覚めんの？ なあ、なあ、なあ、なあ、なあ？」

意識的に震えながら、脚を一步ずつ踏み出して。

二メートルくらいの距離まで近づいてみる。人質の少女は、まだ傷ついてもない。

この期に及んで、ようやく男は口を開いた。

「なんだ……頭がオカシくなったのか？ 寄るんじゃねえよ、コイツがどうなっても良いのか」

引き寄せた少女の首筋に、鋭利な刃が添えられる。

静かに息を呑む少女は、それでも見苦しきの欠片も見せないお嬢様だった。

奴を挑発するような僕の言動を、何も言わずに黙って聞いている。だから僕は、自分の言葉に歯止めが利かない。

「良いんじゃないの？ どうせ夢なら、誰がどうなったって夢でしかないんだから。」

そんなことより僕を殺せよ。そしたら、こんなクソつまらない夢から目が覚める。くだらない妄想から解放される。いい加減苦痛なんだよ。胡散臭い自称ノンフィクション小説を読破したり、興味ないドキュメンタリードラマをマラソン鑑賞したり、クソゲーをクリアさせられたり、校長先生の形式ばかりで中身のない長話を聞かされたりするのを、延々と繰り返してるような気分なんだ。

だからさ、早く殺せって。

早くしろ。

早く。

はやく。

は、や、く。

なあ、おい

そして一歩、前に出るだけ。

「こ、殺すって言うてんだよ！ 止まりやがれっ！！」

「きやあっ」

再び強く少女の首を引き寄せる。そんなにしたら、息ができなくなってしまう。

とはいえ、

「だから知らないって。僕を止めたきや僕を斬ればいいだろ。なに意味わかんないこと言うてんの？」

もう一歩前に。

僕の言葉通りに、直接切り捨てた方が早いだろうから。

「チッ……死ね！！」

当然、人質をどけて僕に切り掛かってくる。

少女を背に回して、右からの袈裟斬り。

僕を瞬時に切り捨て、少女が逃げててもその後すぐに捕まえるつもの動作。

男なりに計算された、無駄の少ない筈の立ち回り。

さつきと同じように、冷淡な光を湛えた切っ先がスローモーションのように迫ってくるのが見えた。

僕は、

ここで、

死ぬ。

嗚呼、

「それでいいんだよ」

「……なっ!？」

確かに奴からしてみれば、直接切り捨てた方が早い。

紛れも無い真実なのだから、疑う余地なんてない。計算にも、間違いはない。

計り間違ったのは、僕の動きだ。

刀を振り上げると同時。前に踏み切った僕に、奴は眼を剥いて唾然とした顔を見せた。

強いて言うのなら、最初に僕の奇妙な言動に気を取られ、接近を許した時点で奴がジリ貧になるのは目に見えていた筈だ。人質の効かない相手が近寄ってきたら、直接手を下さなくては障害になる。

脅迫が通じない狂人は、虫や獣と同じ。

力で振り払うしかない。

そして奴が手を下す瞬間に狂人のフリをやめて人に戻り、僕が無理矢理に隙をこじ開ける。

だから、これは僕の言葉で奴の気を逸らせて、人質を傷つける機会を逃させる作戦だった、というだけのこと。

つまり奴は刀を振り上げる一瞬だけ、油断した。

頭のおかしい僕を見下した。
そう。

僕の視界はスローモーションで、
奴の剣先もスローモーションだ。

「素人臭いんだよ、アンタ」

いくら人を真つ二つにする力があっても、太刀筋が単調過ぎる。

西園君とは比べものにならないくらいに見切り易い。

これなら。

これだったら。

逃げ回るのが得意な僕は、一度くらいなら正面きつて躲してみせる！

「バ ツ!？」

バカな、とでも言おうとしたのだろうか。

奴の懐に潜り込んだ僕は、そのままの勢いに乗せて

「永久宮、さん？」

少女を、突き飛ばした。

「ユ…………キトオオオツ!!」

西園君の叫びが聞こえる。

視界はスローな癖に、声は普通に聞こえていた。

男が、踏み込んで宙に浮いたままの僕へ刀を横に薙ぐ。

景色がゆっくりに見えるのは、死の間際。

だから僕は、死ぬんだ。

あの子が無事なら、それでもいいかな……………なんて考える辺り、僕も大概に終わってるけど。

独りよがりな性格には、自覚もあるから。

「ダメ…………死なないで、ユキトつ!!」

…………マナだ。なんでこんな風に聞こえてくるんだ。まるで走馬灯じゃないか。死ぬのかよ、僕は。

……ああ、そつか。

僕は、死ぬんだった。

自分で、選んで。

溜息が出る。涙はでない。

比喻だけどね、スローモーションの走馬灯なんだもの。

でも、こんなので、ない。

どうせなら、本当に。

「全部 夢なら、良かったのに」

訂正するまでもないけど、さっきのは全部嘘です。お嬢様を無傷で助けちゃったので、嘘までついて女の子を怖がらせたのは帳消しにしてくださいませんか、フェミニスト気味な西園君。

「西園君、マナ……その子を、皆を」

マナさん、約束守れなくてごめんなさい。あと、名前をいつの間にか呼び捨ててしまつてごめんなさい。謝つてばかりでゴメンナサイ。

「後は……頼むよ」

お嬢様、名前をいつまでも聞かないで申し訳ありません。もう、聞きたくても聞けないみたいです。貴女を危険に晒してしまいました。変なことを言つてあの男を刺激したりしてすいません。それなのに最後まで信じてくれて、ありがとうございます、お嬢様。

……よし、独白終わり。

これで心置きなく、死ねるかな？

「いや、だ」

死ねる訳ないか。

死ねる訳ないよな。

「生き、たい」

死ぬのは怖くない。口では何と言つたつて、普通、人は死を恐怖するものらしいけど。

本当の本当に、死は怖くない。

死にたくないのは、未練の所為だから。

思うようには使えないらしいのだから。

剣が刀を弾く音じゃない。

もっと鋭利な。

刀が刀を断ち切る　音。

「なんだ、テメエは　！？」

叫ぶ男。

目を開ける僕。

眩しさに目をしかめ、光に慣れてきた目に入ったのは、

「　堕ちたな、暗人。くろひと　私を　この龍崎を見忘れたか？りゅうさき」

頭上から降ってきた、黒髪ロングの見目麗しい男口調のお姉様でした。

「え、なにこれ……………ネタ？」

僕は、思わず馬鹿なことを呟いた。

第一章 『Curtain call』 5 (前書き)

3月6日、編集・見直しのしやすさ改善のため、第一章を分割しました。

彼等は夢見た。登門を越えて、龍と相成るその水霊ミスチを。

『Curtain call』

その視線は清流。

顔立ちは伶俐。

足首まである長髪は、吹く風に軽々と靡いて大気に溶け込んでい
る。

何より目を引くのは、しばらくぶりに見た気がしてならない、僕
達とは違う制服。それも白を基調とした、清祥高校指定のセーラ
ー服だった。

腕に留めた『生徒会』の腕章は、僕の目から見る限りにおいて余
りに場違い極まりない。

そしてなにより。

僕は、この人の名を知っていた。

「龍崎……先輩？」

まるでマナと同じように、彼女の見開かれた瞳孔が揺れる。

視線は、敵を見据えたままに。

「ああ、久しいな永久宮。……少し待っている、今片付ける」

言うと同時に、鏢つばせ競り合いの状態から。暗人と呼ばれた男の全身
をズタズタに引き裂き、そのまま回し蹴りで本日二回目となる池へ
と叩き込んだ。

「ぐ……があああっ！」

一瞬。

勝負は一瞬。

切り付けたのは見て取れるだけでも十箇所以上。鋭すぎる斬撃は、“切る”というよりは“斬る”と形容すべき剣閃の冴え。

正直、全身の切り傷から血を噴き出す様はトラウマになりそうだった。

「欲望は剣を鈍らせる。今のお前では、私には勝てないぞ、暗人」

そうして、この騒乱は一応の落ち着きをみた。

鏢競り合いという本来は拮抗している筈の状態から、一方的に攻撃を加えるその剣速、その剣捌き。

そう。西園君の所属する剣道部の先輩であり部長。プロ、非公式派閥までをも含めた中、若干十八歳にして全国で最も強いと讃えられた、希代の女性剣士 龍崎、毬藻^{まりも}。

「……だから、名前を呼ぶなと何度言わせるのだ、お前は」

「あ、すみません、龍崎先輩」

忘れていたが、この文武両道にして男勝り気味な完璧超人は、とにかく名前と呼ばれるのを嫌う。

本人いわく、『可愛い名前は私には似合わない』とのこと。そういう問題か？

もつとも、クールな口調と中性的だが端正に整った容姿は、決して崩れる所を見せないのではあるが。

「うむ、よろしい。それに……西園も久しいな」

視線は僕の肩越しに後ろへ。

僕の背後にいたのは、いつの間にか近寄って来ていた西園君だった。

「別に久しくありませんよ、部長。昨日剣道部で試合ったじゃないですか。……何やってんですか、そんな物騒なものの振り回したりして……ホント、アンタらしくもない」

勸善懲惡平和主義の西園君は、最後の方だけ呟くように言うた。疲れたように気を抜いた。油断しても大丈夫と判断したのだろうか。

……しかし。

「さて、ここにいる……十数名は私について来てくれ」

“現状”を、説明しよう。

そう口にした何気ない言葉が、僕を限りなく不安にさせるのだった。

そこからは、十人近い人間がぞろぞろと龍崎先輩について回るようになった。

人数が少し減っているのは、龍崎先輩に着いて行きたくない人や、『自分がやりたいようにやる』と言って憚らない人達が勝手に散っていったから。

なにせ狭い田舎町だ。僕だって、知らない内にこの中の誰かとは顔ぐらい合わせたことがあるかもしれない。

有名人である龍崎先輩や西園君なんかに至っては、敵視する人間がグループ単位で存在しているみたいだし、仕方のないことではあると思う。……命知らず過ぎるとも思うが。せめて、平穩無事を祈ろう。

あの中には、知り合いを殺された人だっているはずだから。

少なくとも、他人の意思を否定する権利なんて誰にも無い訳であるからして。

「つーか、大丈夫かよユキト……まさかお前に限って怪我するとは思わなかったぜ……」

そりゃそうだ。敵に遭遇したら逃げに逃げ、避けに避けまくるのが僕だからなー、随分と情けないことに。なので、それだけは技術に自信がある。

ちなみに僕は今、両側から西園君とマナさんに肩を借りて歩いてもいい、運ばれている。

流石にもう歩けない。限界だ。

龍崎先輩は「む、骨が折れている上、内臓器官はダメージが深刻

だな……昔のように背負ってやろうか、永久宮？」なんて言っていたが、先導する人間の背中なんかにいたら否応なしに皆の視線が集中するので丁重にお断りさせていただいた。その後、西園君とマナさんがそれぞれ肩を貸すと提案してくれたので、二人に「もう立てない」とお願いして両側で支えてもらっている。本当に情けねえな、僕。

「ところで龍崎先輩、“昔みたいに”ってどういうことですか？」その言葉の意味が分からない。だって、僕は龍崎先輩に背負ってもらった記憶なんてないんだから。……もしや、また僕の記憶がなくなっているんじゃないかな？

そんな不安を余所に、龍崎先輩は少し考え込んだ（案内人が歩きながら考え事に没頭していいの？）後

「すまん、勘違いだったようだ。確かに、お前を背負った記憶はなかったな」

「ですよ……」
良かった、安心した。

なんつー惚けた会話をしとるんだ僕達は。

変な話だが、同時に少し、そのおかしな記憶が羨ましくもある。僕の記憶は、若干の空白を抱えているから。

足りないより、余っている方がずっとマシな気がしてならなかった。

「それより説明してくれよ、部長。アイツら、いったい何なんだ？ 昼間つから刃物振り回す連中が居て良い訳があるかよ。警察はどうしたんだ、警察は」

もっともな意見だ。

『あんな奴らが野放しにされていなければ、こんなことにはならなかった』

きつと、この場にいるほとんどはそう考えている。というか、普通はそう考えるんだらう。まともな人間なら。

「……いやいや」

……やれやれ、なに考えてんだか。僕の頭ん中のがよっぱど
中学二年生してるじゃねーかよ。

そんな下らない事を考えていると（まさしく愚考）、龍崎先輩は
西園君の問いに苦々しく答えた。

「……警察なんていないさ。少なくとも、この街にはな
「……は？」

目が点になる。

いや、もともと眼は点みたいなものだけけど。
きつと、周りの皆も揃って同じだ。

「いないって……なんでまたそんな……」

現代日本で絶対耳にすることのない……というか、してはいけな
い意味合いしかないだろう、その言葉は。

西園君が信じられないといった面持ちで呟く。

「それにしたつて、一人もいなくなる筈があるか……？ 事件を起
こして陽動された？ 上から圧力をかけたのか？ いや、そんな筈
が……有り得ない……」

確かに、そんなことは有り得ない。なにせ、この街を担当する警
察署の署長こそが、西園君の父親なのだ。それもこの息子を教育し
た、である。“厳格”どころの話ではない。どうやってその地位に
ついたのかが分からないほどに、自分の正義を貫こうとする人間だ。
犯罪を見逃す可能性を見逃して、圧力をかけたりなどする筈もない。
「違うんだ、西園。違うんだよ」

それを制したのは龍崎先輩だった。

聞きたくない、というように目を綴じて首を横に振る様は、なに
か恐ろしい真実が隠れている証拠だとしか思えない。

そして、そんな僕の予感は的中する。

「警察だけじゃないんだ。今、この街にいるのは 子供、それも
高校生だけ、なんだよ」

「……っ！？」

息を呑んだのは、誰だっただろう。

到底信じられることではなかった。

先輩の頭がおかしくなってしまったのかと、真剣に悩むべき場面だっただろう。本来なら。

しかし不運にも、あの超常現象を目にしていた僕達には説得力をもって響いた。

そんな説得力は、誰一人として求めていなくても。

それを予想してか、龍崎先輩はこう続けた。

「信じなくてもいい。むしろ信じるな。自分で目にした物だけを信じる。それがこの街。この『世界』で、生き抜く為には必要だ」
街を『世界』と称した意図は、この場の誰にも分からなくて。

取り返しのつかない奈落に嵌まっていたことを、僕は今更のよう
に理解した。

それから龍崎先輩は、今の僕等がおかれた状況を、一つ一つ説明
してくれた。

自分で確かめてくれ、と前置きして、

「今この街には大人がいない……そう、一人もないんだ。だから、
基本的なライフラインはほとんど止まっている。ガス、電気、食料
の流通もだ。あるのは街の中にある浄水施設だけ。それでさえ、子
供全員分の水も精製できない。食料は定期的に街のどこかに補充さ
れているが、やはり奪い合い、殺し合いだ。……さっきのようにな
いきなりのハードな話題に、僕達は誰もが呆然として聴き入るし
かなかった。

「言葉通りの弱肉強食なんだよ、この街は。

私とて気づいた時には、お前達の言っていたように此処に倒れて
いた。もう、しばらく前になるがな。

……始めは数人だけだった。定期的に人が増えるんだよ、この街
は。仕組みは誰も知らない。なのに、人が増え、食料は与えられ、
しかし足りない」

そこまで聞いて、西園君は先輩にこう尋ねた。

「なら、街から出りゃあいいだろ。そうすれば……」

「それも無理だ。街からは、出られない……………物理的にな」
しかし冷静に否定される。

「それってどういう……………」

僕が口にした疑問に龍崎先輩は答える。

「見た方が早い。西園、ちょっとここに来て、手を伸ばしてみる」
「はい？」

西園君は僕を支えている肩を離し、僕の身体をマナさんに預けて龍崎先輩の隣に歩み寄り、並ぶ。

彼が訝しげな顔をしているのは、この場所に依るものが大きい。
交差点。

ここ御旗市の西にある、街の外れにある大きめな交差点。

主要都市へと繋がる道が交差する、田舎と都会への境界線のような場所。その、真ん中で。

「ここから先には、出られない。……………やってみれば分かる」

先輩が示すその先に広がるのは、無人であることを除けば至って普通の町並み。

言われるままに首を捻りながら、相手に静止を求めるような構えで腕を前に突き出し、ゆっくり歩く。

そして……………そのまま一歩前に出た時点で、西園君の動きが止まった。

「……………っ!？」

「ど……………どうしたのさ？」

思わず尋ねた僕が見たのは、眼を見開き、腕に力を込めるような動きを繰り返す彼の姿。酷く焦っているように見える彼は、嫌な予感しか感じさせなかったのだ。

「……………嘘、だろ？」

既に本日何度目かになる台詞に、周りの皆は息の詰まったような顔をして

「壁が……………見えない壁がある……………!」

直後、驚愕に見開かれた。

幕間1 『夢幻』（前書き）

その名の通り幕間その一です。

意味不明なのは仕様なので、作者の頭の心配は不要でナツシングな
のです。もう手遅れです。

ちなみに、この作品は視点が一人称やら三人称に変わります。二人
称にならないのは残念ですが。お気をつけくださいませ。

という訳で、脳味噌ヤバげな前書きでした。

幕間1 『夢幻』

『夢幻』

××××は夢を見る。

明るく楽しい夢を見る。

皆でワイワイ、皆でガヤガヤ。

楽しい楽しい夢を見る。

大切な人がそこには居て。

そこには大切な人が居る。

隣にいつも彼女が居て。

周りにいつも皆が居る。

そんな、夢。

周りにいつも皆が居て。

隣にいつも彼女が居る。

そこには大切な人が居て。

大切な人がそこには居る。

楽しい楽しい夢を見た。

皆がガヤガヤ、皆がワイワイ。

楽しく明るく夢を見た。

××××は夢を見た。

でも、もう終わり。

夢から、覚めなきゃ。

夢だから、覚めなきゃ。

さよなら、ばいばい、また会おうね。
さよなら、ばいばい、また会おうね。
手を振り合つて目を閉じる。

まるで、眠るみたいに。

そうして僕は目を覚ます。

何も無い、誰も居ない現実に戻る。

やっぱり、辛くて悲しくて苦しくて虚しい。
虚しい。

現実なのに。

夢よりも。

そしてまたいつか、同じように夢を見る。

そこにはやっぱり皆が居て。

隣を見れば、彼女がいた。

嬉しくなつて声をかける。

ただいま。

皆もそれに応えてくれた。

はじめまして。

そして理解した。

悟つてしまった。

夢に続きはない。

夢の続きはない。

夢は、続かない。

皆はあの時の皆じゃない。

こんなの嘘だ。 夢に決まっている。

あれ。

夢だっけ？

でも、眠らないと現実には戻れないんだっけ？
あれ。

あれ？

どっちだろう。

これは、いったい何番目の夢？

それとも現実？

何番目の現実？

これは、いったい何番目の現実？

どっちだろう。

あれ？

あれ。

分かんないから、どっちでもいいや。

夢でも、現実でも。

覚めないのなら、どっちでもいい

第二章 『生徒会』 1（前書き）

どうもこんにちは、工人です。

今回は頑張って早めに第二章を投稿です。

どうぞ何卒、批評の類もよろしくお願いします。

第二章 『生徒会』 1

Q・人間とは何か？

A・ケダモノの一種。その中でも、自分達に知性が有ると思っ込んでる種族を指す。

『選択死』

冷たい現実には、体温と感覚を奪われる。

見えない壁に触れた右手は、押しても引いても微動だにしない。否。

引くことはできる。引くことだけは。

それはつまり、逃げる者を逃さない構造をしているということ。

龍崎先輩、西園君、マナさん、小さなお嬢様、その他数人の人達、そして 僕。

僕達は、未だ見えない壁を前にしたまま動けずにいたのだ。

「何だよ、これ……」

呆然と呟く西園君。

それに答えたのは、他ならぬ龍崎先輩だった。

「分かん。この街の、誰にも……お陰で誰一人ここから出られない、という訳だ。もっとも、私の解釈は別にあるのだが」

「そんなこと言ってる場合かよ！ なんでアンタは冷静なんだ、こんなことが現実にあっつていい訳があるか！」

食ってかかる西園君に、龍崎先輩が口を開く。

「冷静……当然だ、そうでなくてはここでは生き残れない」

「だから……ッ！」

場違いな感じはするが、僕も尋ねてみる。

「つまり、それってなんで先輩が落ち着いていられるのかってことですよ？」

要約すればそんな感じの質問だと思う。

それに対して先輩は、そうか、とゆっくり頷いた。

「簡単な話だ。私がここに来てから、もう半年になる。それだけのことだよ、西園」

「……ま、待てよ、そんなのおかしい。こんな壁は今までなかったんだ。それだと有り得ないことに……」

それは、それはおそらく……。

予想はある。

しかし妄想でもある。

こうである可能性が高い。

だが、信じられない。

普通なら有り得ない事だ。

「西園……私は覚えているぞ。お前の言う、試合をした日の事を」
「……私だけどうも現状は、全然普通じゃない。」

「きつと」

呟いた僕に、視線が集まるのを感じた。

けれど口にするのをやめられない。妄執に似た何か、頭の片隅にこびりついて離れてくれない。

「……過ごしてきた時間が違う。多分、僕達が気を失った時期は同じで、それでいて目を覚ました時期が違う。辺りの季節を見る限り、きつと」

有り得ない。

自分で口にした端から否定してしまいたくなる。

今やめなければ、僕は頭がおかしい人間だと思われるだろう。

……けれど。
それならば。

脇役の僕は、主役の為に敢えてその道を選ぶべきなのだろう。
その為に、こんな性格の僕が現状に紛れ込んでいる。

酷い自己満足。偽善者。迷惑極まりない。

それでも、僕は“今”という“刻”^{とき}に物語を、ストーリー性のよ
うな何かを感じてやまない。

人知を超える力を、目にしてしまったが故に。
直りかけの僕が、再び壊れた。

そして壊れかけた僕の運命は、今度は音をたてて 砕け散った。

「 今までは、時間の流れが違ったんだ。おそらくはたった今、
僕達と先輩達の足並みが揃った。どんな理由があるかなんて分から
ないけど、そんな気がしてならないんだ」

だって僕は

そう続けようとして、遮ってきたのは意外にもマナさんだった。

「大事なものはそこじゃない」

何となくだが、なぜか少し焦った様子にも見える。

「龍崎……さん、だったかしら。現状の説明を続けてくれる？ そ
れと あの力についてを、教えてほしい。貴女なら、知っている
んじゃない？」

そうだ。彼女には、例の件がある。あれが何なのか聞いておきた
いというのは、マナさんにとって切実な話だろう。

「そう、だな。この場にいる以上、伝えねばなるまい。……ついて
来い、安全な場所に移動する。列になるなよ、殿はいないんだから
な」

言って歩き出す先輩を追って、僕は肩を支えられたまま、少しずつ
歩き始めた。

隣にいる西園君とマナ、二人の表情を見ないようにしながら。

そうやって語りだした先輩の話は、聞けば聞くほどに現実離れし

た現状を浮き彫りにしていった。

「理由は考えるな。……そういったルールだと諦めた方が、まだマシだろうからな。」

今のこの街には、高校生程度の年齢の人間しかおらず、他には誰一人としていないこと。

力が支配する、世紀末顔負けの弱肉強食がルールであること。

そんな中で彼らは、生き延びる為にそれぞれが目的や信条を掲げた集団を形成して生きている事。

既に組織として動いている集団がいくつもあり、構成、運営もすべて高校生でありながら、もはや有り得ないレベルになっていたりする事。

水道は街唯一の浄水施設により、かろうじて使用できること。

しかし浄水施設は、中立を宣言した謎の集団が占拠、管理をされていて近づけないこと。

食料は不定期に、場所を定めずどこからともなく支給されること。

それを知らせに来るのは、『骸』と名乗る女性であること。

「なんつー世界観だよ」

「茶化すな、西園」

「……どう考えても、食料関係が怪しいですよね」

うん、間違いない。攻めるならここからだ。

……もっとも、先輩が攻めあぐねている時点で望み薄だが。

「そして、一番重要とっていいことがある」

何を言い出すのか、おそらく皆は分かっている。

その証拠に、息を呑む音があちこちから耳に届いているのだ。

「この街には、なぜか不思議な力を扱う人間がいる」

やはり。

分かっていたことでもあるが、こうして他人から聞くと重さが違う。

あれは現実だったんだ、と。

今更のように僕は思った。

「いや、少し語弊があるか。正確に言えば、『今のこの街では不思議な力が使える』というべきか」

「それって、どういう意味ですか？」

「そのままの意味だよ。誰でもいい、強さの強弱はあれど、ここではフィクションじみた不思議能力が使えてしまふ、ということだ」

「……………」

いきなりそんなことを言われても、リアクションに困る話だった。「うわー、すごいなあ」

「棒読みはやめてくれ、永久宮。笑い事じゃない、自衛には必要なんだ。後で使い方を教えてやってもいい」

軽い。あまりに軽い。

その軽さで手にするのがあの惨劇を引き起こし得る力なら、確かに、あまりに笑えない話ではあった。

今のこの人の中では、命の重さはいったいどの程度のものなのか、なんとなく気になった。

聞いたり、しないけれど。

ああ、できないの間違いか。

「……………さあ、着いたぞ。ここが私の所属する『生徒会』の拠点
清祥高校改め、最果学園だ」

僕らを見下ろす四階建ての校舎は、いつもと変わらない姿でそこに在った。

歩いてくる途中の風景から行き先に心当たりはあったが、久しぶりに見たような気がしてならないその威容は、どこか荒れ果てて見える。

この世の終わり……………いやむしろ、この世が終わった後の景色に見えないこともなかった。

「……………と、いいながらなんで体育館倉庫？」

思わず口をつくフザけた発言は、数刻前に虐殺を目の当たりにした人間としては不謹慎極まりなかった。

やっぱり僕は、ひとでなしなのだろう。

先輩は声をひそめるように皆に注意すると、自らも小さな声でこう言った。

「……すまないが、組織の人間に見つかるのは厄介だからな。ここで、選んでもらう」

従うか、死ぬかを？

真面目な顔で聞いてみると、周りの空気が凍り付き、龍崎先輩は慌てて訂正した。

「な……ち、違うぞ、違う。そうならない為にここに隠しているんだ。だからそんな目で見るなっ」

顔を赤くして慌てまくる先輩は、なんか可愛かった。

というか、未だにこの人の恥ずかしがるポイントが分からない。

以前剣道部のシャワールームを借りた時、迂闊にも彼女に遭遇して肌を見てしまい、土下座から土下寝に移行しようとしていた僕に対して特に表情を変える様子はなかった。

何やってんだ貴様と自分に言いたくなるが、相手は怒ってさえいなかったように見えたので首を傾げるしかない。

かと思えば、今の会話では顔が真っ赤になる。

特に、自分という人間を曲解されるとこんな風になるみたいだ。

「……ん？」

……ああ、自分の外面より内面の未熟こそを恥じているのか。

解決。今やっと分かった。

と、思った瞬間。跳び箱に寄り掛かる僕の足に違和感。肋骨に響く激痛。

「あれ？ マナさん？ なんで僕の足踏んでんの？ ねえ、痛いつ

て。あれ、聞こえてない？ 痛いって、ねえ、マナさん？」

「うるさい」

「いや、うるさいじゃなくて……」

僕、怪我人ですけど。

「よく分からんが、その辺にしとけよ逝人」

「ああわかったよ……つてあれ、西園君まで。僕の足は二本しか無いんだけど軒並み膝が折れそうだよ。ていうか助けて龍崎先輩」

「……少し真面目に話を聞け。周りの連中に白い目で見られたくなければな」

その一言が効いたのかは分からないが、渋々と足を退ける二人。ずるずると倒れ込む僕。

立ち上がるのがメンドイからこのままでいいや。

「『生徒会』は、清祥高校にあった本来の生徒会を前身とした組織だ。この無法地帯において、秩序良俗に基づいた正義を規範とする為に興った自治会のようなものだ。勢力として最も大きく、既に学園周辺の街を三分の一ほど占領している。平穏が欲しい人間の受け入れもしている。特に目的がないのであれば、庇護下に入ることを薦めておく。ただし……」

まだ続けるのか、と皆は戸惑う。それはそうだ。この状況下で、そこまでやってくれるというなら迷わず加わることを選ぶ。

そんな僕達に向けて、先輩は一言、

「……若干、独善的なきらいがあつてな。それに、抜けることは許されない。裏切り者は敵と見做す、一種の過激な組織でもある」

それで名前が生徒会かよ、な話だった。

そんな馬鹿な事を考えていると、なぜか脈絡も分からないとんでもないことを断言した。

「永久宮、少なくともお前は入らないだろう？」

「……………ええー」

皆の視線が刺さる。止めてください先輩。気にしている訳ではないですが、僕はあまり目立ちたくないんです。

それともなにか？ 僕が入ってはいかんですか？ 僕だって元生徒会役員ですよ？ 嫌がり、無理矢理、一年限り、ついでに名ばかりと一つ余計に四拍子揃った駄目風紀委員でしたが。

「いや、別に入っても良いが。……だが、私の知るお前ならば入りたがらないだろうな、と思っただのだ」

信用があるのか？ ないのか？ どっちだ？

……よく分からないが、信用するなとだけ言わせていただく。

「まあ、そうですね」

さすが龍崎先輩、分かっているらしい。僕、正義とか面倒くさい人間なので。

「分かりやすい嘘をつくな。右も左も分からない現状で本気で口にするほど、頭が軽いお前ではないだろう」

「さて。過大評価だと思えますけど」

「ぬかせ。私を辱めた男が、まっとうな人間な筈がないだろう」

ひでえ。道連れ式にろくでなし宣言か。

っていつか、辱めたって言うな。さつきから視線が痛い。誰か脇役の苦勞を分かってくれる奴はおらぬのか。主役級の近くにいないだけで視線が飛んできて堪ったもんじゃない。

「受け取れ、永久宮」

先輩は紙切れを手渡してくる。

「後で見っておけ。時が来れば役に立つ」

「有り難く貰っていきます」

メモのようなそれを、たった今見つけた制服の内ポケットに入れておいた。

おいてけぼりを喰らったような顔をしていた周囲の人達も、どうやら再起動を果たしたようだ。

「では、永久宮はここに残れ。せめて怪我が治るまではここに居ろ、多少の世話はしてやろう。生徒会に加わる人間は私について来い。加わりたくなければここに残っている、二、三日中には逃がしてやれるだろう」

そう言った龍崎先輩は、外を確認しながら扉を僅かに開けた。

「来い。急げ、出入りを見つかるのは不味い。それと、この事は誰にも言つなよ。それは組織ではなく私個人に対する裏切り行為と見做すからな」

皆が外に出て行くのを見送って、扉が閉まった後。

僕は一つ、溜息をついた。

「……で、なんで君達はここにいるのさ」

「お前一人じゃ心配だからな。しばらくは付き合っただら……親友だろ？」

答えたのは、西園伸一。

「約束、守つてね？」

隣から動かなかった片目の少女 マナさん。

周りを見れば、人影が一、二、三、四、五人。

……五？

「貴方には、命を救われた御恩があります。それも二度もです。このままでは彩園寺真尋……ひいては彩園寺家の名折れ。どうか、貴方について行かせて下さいませ、逝人様」

小さなお嬢様が、こちらを見ていた。両手を組んで、祈るようにして。

僕が何か言う前に、別の方向から能天気で脳気な明るい声が聞こえてくる。

「ウチもな、ウチもな、堅っ苦しいの苦手やねん。仲間なかまー。

いええーい！」

「……どなた？」

「ウチはねー、苦道目王ちゃんです、全然名前かわいくねー！
胡散臭いエセ関西弁の女の子は両手を腰に当て、茶色の短髪を前に突き出して、ニシシと笑っていた。

見えにくい、一見すれば着けていないように見える、半透明な首輪の色だった。

「儂を忘れるなよ、おぬしら」

まだなんか居る！？

後ろを振り返れば、彩園寺さんよりは少し大きな女の子が、鈍色の首輪を身に着け、跳び箱に座っていた。

いや、あの制服は……。

「ロリババアではないぞ。それに対抗するために生み出されたいわ

ばシヨタジジイ、霧音島寿吹きりねじまことひびきと呼んでもらいたいのう」

うわーい、面白い名前がいっぱいだね！

「これ、現実逃避するでない。逃げちゃ駄目だ。戦わなきゃ、現実と」

なんかもう、色々台なしだった。

「ちなみに、僕は自分がオタクであるという自覚もあるのじゃ
訂正、台なしどころじゃなかった。」

お笑い担当と思われる二人までが急に現れ、僕は彼ら五人に対して既に虚ろげな視線を投げ掛けざるを得なくなっていた。

嫌な予感がする。

むしろ嫌な予感しかない。

「……なんだよ、このカオスなメンバーは……」

こんな濃いキャラが今までモブに混じってたのか？

「諦める、もうどうにもならんだろ、これは」

どんな顔をしていいか分かりません。

「泣けば、良いと思うよ」

慰めてくれる西園君とマナさんに言われて、僕はさめざめと泣いた。

勿論、嬉し泣きではなかった。

そして、この時の僕は気づいていなかった。

この六人の中心となりつつあるのが誰であり、彼等がこれからどのような軌跡を描こうとしていたのかを。

今はまだ、誰も知らない

第二章 『生徒会』 1（後書き）

ちなみに、第二章も第一章のように分割しています。しし注意下さい。

第二章 『生徒会』 2

毒を以って毒を制し、毒を盛って人を殺す。悪を以って悪を制し、悪に因って人を為せ。

『覚醒（笑）する少女』

しばらくして、息つく暇もなかった心を落ち着かせる為に、僕を含む六人は雑談をしていた。

「では、逝人様は以前生徒会役員を務めていらしたのですね」

今僕と話しているのは、向こうで他の四人が行っている自己紹介から抜け出してきた彩園寺さんだ。

「というか、さっき皆と自己紹介をしてびっくりした。この小さいお嬢様も、あの小さい少年（？）も、僕と同じ年だと判明した為である。」

「うん、ほんの一時期だけだね。生徒会長はいい人だったんだけど、なんか副会長が苦手です。」

「……………っていうか、その様付けはやめない？ そんなたいした人間でもないんだし」

すると少女はふふ、と笑って、「それよりも、私の事は真尋とお呼び下さい、逝人様」なんて言っただけだ。それよりも、って……………。

「あ、はい」

しかも額かされてしまった。交渉にすらならなかった辺り、この子には敵わないな、と思う。

「なんじゃおぬしら、こんな朝早くからいちゃつきおつて。金髪赤目ツインテお嬢様と仲良く談笑……儂への当てつけなのか？」

「……急に現れないでくれ霧音島さん、心臓に悪い。あといちゃついでなんかないません、当てつけでもありません」

「……分かっていらっしやっただのなら、邪魔をしないでいただけますか？」

僕と真尋ちゃんは同時に反応したらしく、お互いが何を言っているのかはもとより、自分がなんて言ったのかも分からなくなった。「そりゃあすまんかったの。ああそれと、儂のことは寿吹と呼べ。」

……ところで、そろそろあの女が帰ってくる頃合いじゃぞ？」

聞き分けていた。聖徳太子か？

……時計も無しによく分かるな、と思ったが、確かに龍崎先輩が帰ってきてもおかしくはない時間が経過している。

「いやー、やはり女子は黒髪ロングに限るのう。なんかこう、いかにも日本的なしとやかさと女性らしさがある。むしろ、女性らしさのすべてはそこに詰まっているといえる！」

どことなく、オタク趣味に走ったじいちゃんを見てるようで痛々しかった。台なしだった。美少年台なしだった。

なんて思っていると、目の前の寿吹君の頭の上を一筋の光が突き穿つていった。

「ぬおおおっ!?!？」

悲鳴は寿吹君のもの。

巻かれたマットに中程まで刺さっているのはグラディウス（セピア色）。

当然だが、持ち主は同じくセピア色の長髪をしたマナさんだった。「うふふ……それ、喧嘩売ってるの？」

口は三日月のように弧を描き、見た感じでは笑っているのだが……目が笑っていない。

今は包帯に覆われて左目だけしか見えないが、もし見えているのなら絶対右目も笑っていない。

目が笑っていないという表現はたまに聞くが、敢えていうならこれはむしろ、口しか笑っていないというべき表情だ。

必死に首を振る寿吹君。

多分何が何だか分かっていない寿吹君と、キレかけているマナさんに、話を逸らす良い話題があつた。

「剣、剣出てるってマナさん！」

「……………あ」

ハツとして剣に駆け寄るマナさん。一方、解放された寿吹君は半泣きだった。

「おーよしよし」

あまりに可哀相で、何となく頭を撫でてみた。

「こ、これ、子供扱いするでないっ」

……………なんで男なんだ、需要少ないってのに。

とかなんとか遊びながら、僕も剣を見に行く。西園君達他の人も、同じように集まってきた。

「凄い……………綺麗……………」

声を漏らしたのは誰か。

先の機会には見る暇もなかったが、じっくりと見てみれば確かに美しい剣だ。

写真のネガのように半透明に透き通ったセピア色で、無機質な直線^{ライン}が何本か刻まれている。

しかし頑丈で、切れ味はとんでもない。

その証拠として、投擲という本来の用途とは掛け離れた使い方をしてなお、マットを貫通している。

更に妙なことに、切り口の繊維を引き千切ることなく、幽霊が壁を通り抜けるかのようにそこに存在していた。

剣という道具は、元より対象を擦り切る為の構造だというのに。

「カツコイイ剣だにゃー」

分かりにくい半透明な首輪をした、苦道目王さん。

この人はこの人でお気楽過ぎる。それが何の為に使われる道具な

のか、知らない訳でもあるまいに。

あと、安定しない口調がエセと呼ばれる所以であることに気づいていないのか？

「それがお前の武器だよ、マナ」

突然後ろから投げ掛けられた言葉に、僕は扉を背にしていた事を思い出し、弾かれるように振り返る。

声の主を確認して、ああ、そうだったかと肩を落とした。

「少しは声量を落とせ。私以外に見つかったらどうするつもりだったんだ、馬鹿者め」

僕達に知識を与えてくれる、賢者様の御光臨だった。

ていうか龍崎先輩だった。

今更のように気づいたが、先輩も首輪をしていた。暗くて深い、水底みなぞこのような紺色だった。

「お前らには私が直接教え込んでやる。では、授業開始だ」

なんかカツコ良さげな宣言だな、それ。

「という訳で、まずはこの力がなんなのかから説明しよう」

「待て、それは分かってんのかよ？」

西園君の言葉に、ああと返事をする先輩。

「浄水施設を占拠している連中がいるといっただろう。奴ら、研究と称して色々調べては公表しているんだよ。かなり前に発表されたものだが、未だに資料があちこちにばら撒かれているのさ」

目的まではハッキリとしないんだが連中の資料だけは信用できるからな、と呟くと、改めてこちらに向き直った。

「まず、どんなことができるかだが、そうだな……観念的な話になるが、仕組みの上では『どんな事でもできる』と言っていい」

「え？ それって、どういう意味ですか？」

「なんでも、この見えない壁に囲まれた街では『考えた事が現実になる』らしい。いや、厳密に言えば少し違うな。『思い込めば現実になる』のさ」

うん？ 本当に分かりにくい説明だ。

「そうだな……良い例があるじゃないか」

指差す先にあるのは、さっきマナさんが投げた剣がある方向。龍崎先輩が現れた時とは逆に、皆は一斉に反対方向を向く。

「……あれ？」

疑問の声を上げたのは外ならぬマナさんだ。

しかしそれ以外の皆の顔も、おおよそ似たようなものだったのではないかと思う。

セピア色のグラディウスは、跡形もなく消え失せてしまっていた。剣が突き刺さっていた筈のマットは、綺麗さっぱり元通りになっている。見間違いかと思ったが、そもそもマットは一つしか置かれていなかったことを思い出す。

「消え……た？」

マジックのような現象に、頭の中がおかしくなりそうだ。

僕らは夢でも見ているのか？

……いや。僕は、夢でも見ているのか？

「そう驚くな、これは基本中の基本の原理だ。考えた事が現実になるのだから、剣が意識の外に外れた時点で、お前の中にある剣の想像イマジが消えてなくなったんだよ」

「ええと、つまり私が『投げた剣が刺され』と思ったから刺さって、『もついいや』って思ったから消えたってこと……なのかしら？」

「簡単に言えばな。」

私達はそれを『アンリアル幻実』と呼んでいる。それを扱える人間のことは『アンチリアリスト反現実能力者』、とな。

コツはいるが、思い込むことが可能ならば現実にはできる。今回はいい加減なイメージだから消えてしまったが、無意識に覚えてさえいられれば、その間はずっと継続される」

「……何ですかその夢の能力は」
呟いたのは僕。だってそうだろう。物理法則を光年単位で置き去りにしている。

それを聞いた先輩は、くっくくと笑っていた。

「……夢、夢か！ 言い得て妙だな、永久宮。確かに、これは夢を見せる能力だ。もつとも、外ならぬ自分自身に、だがな」
夢。

そのキーワードは、自分が想像していた以上の衝撃を僕に与えた。「そうだな……例えば今、私とお前は会話していると思うか？」
うん？

突拍子もない事を言う龍崎先輩に、僕は困惑した。

「会話なら、今してるじゃないですか」

「お前は何について話している？」

「何って……『幻実』とやらについてですけど」

「では、私は？」

「先輩も、ですよ。会話してるんですから」

「いや、それはお前の妄想だ。本当は私は、日本刀の刃紋の美しさについて熱く語っていたところだったんだ」

何言ってるんだ、この人。

「いや、そんな訳……」

「それとも何か？ 『僕が間違っ筈なんてない、間違っているのは龍崎先輩の方だ』……とでも言っつもりか？」

「……言いませんけど……でも、会話が成立してたじゃないですか。意思疎通はできる」

「ならば、それがお前の妄想ではないと、どうやって証明する？」

それはつまり、会話が現実であると証明さえすればいい訳で。

現実であると証明できる証拠があればいいのだが……。

「……あ」

できやしない。

できる筈がない。

確かに、現実である証拠を見つけなければ、妄想となら変わら
ない。

なら、その証拠ってなんだ？

証拠を見つけたとして、それがそういう性質の空想でないとなぜ言える？

『証拠を見つけ出す夢』ではないと誰が言える？

「……結局は、誰にも分からない。いや、そも他人というものが存在するのかさえも証明は出来ないのだから。全ては自分で考え、自分が決めるしかないんだ。昔の有名な学者は言ったぞ、『我思^{コギト}故^{エルゴ}に我在^{スム}り』、とな。本当に確かなのは自分だけ。そういうものだよ、現実なんてのは」

「……………」

黙り込むしかない。

未だかつて、ここまで堂々と『現実と想像の区別がつかない』と言い切った人間なんて見たこともない訳で。なのに、この人が言ったのならそうなのかもしれない、と思わせる何かがある。

少なくとも、他人から聞いただけの知識を無条件で信じたり、無責任に広めたりする人間でないことは確かだから。

……よし、見失うと悪いから断言しておこう。

僕は、龍崎毬藻という人物を信用している。

「どうすれば扱えるんでしょうか……………」

真尋ちゃんが首を傾げると、先輩は嬉しそうに語りはじめた。もしかしてこの人、教師に向いているんじゃないだろうか。

「実践あるのみ、だ。早速、練習してもらおう。とはいえ、私が教えたからといって出来るようになるかは本人次第だがな。まあ、既^レに出来る人間はいるようだが」

マナさんに視線を向けてそう言う。

「皆には、基本中の基本とも言われる幻実の武器

^{アンチリアルウェポン}
『対現実兵器』

を扱えるようになって貰う。私や奴らが持っていた刀がそうだが、形状はなんでもいい。自分の闘争本能を形にするんだ……………やれやれと言われて出来るなら苦勞はしない。

と、思ったら。

「あ、出来た……………」

「うおおーう、ウチの槍メツチャ長いっ!!」

目の前には、僕の命を救ってくれたセピア色のグラディウスを持っているマナさんと、おそらく三メートルを優に越す硝子の槍クリアランスを軽々と振り回す目王さんの二人がいた。

「私わたくしにも出来ました……」

そう隣から聞こえてきたのを見れば、真尋ちゃんが赤紫マゼンタでカラーリングされた機械的というか近未来的なレイピアを、なぜか逆手に握り締めている所だった。

「……数日掛かりになると思っていたんだがな。なんでこんなレベルの連中ばかりが……ああ、そうか」

思案顔から一転、納得した様子の龍崎先輩。

……で。

「……なんでこっちを見てんですか？」

僕が何をしたってんだ。「いや、なんでもないよ」
軽く流されてしまった。

しかし……見るからに分かるが、男性陣は全滅だった。

西園君も寿吹君も、サッパリだという表情。

「当たり前だ。すぐに出来る方がおかしいんだよ、お前達はじっくりやれ」

多分先輩なりに励ましているんだろうが、イマイチである。真面目で不器用な人だ。

出来ない男三人で肩を落としている光景。

しかし

「お、出来た」

西園君が驚いた声を上げた。

握るのは、青い鞘と柄を持つ古風な大太刀。刀身は純粋な鋼の色だ。

裏切り者め！……的な視線を送っているのは、僕ではなくて隣の寿吹君だけねど。

やはり、出来るイケメンは違うらしい。

これがオタクとリア充の違いとやらか、なんて、寿吹君を見て特に根拠もない演繹法で考えていた。

ふと、横にいる寿吹君の顔を見ると笑い掛けてきたので、僕達は淋しげに笑い合った。

多分、僕がさっきまで失礼なことを考えていたのは、気づかれていないようだった。

……しばらくして。

「先生、できません」

「先生、できんのじゃ」

出来の悪い、週末にはインターネットで某最大規模の掲示板群を覗いてしまうような二人組は、知り合って間もないのに一種の友情を築いていた。

ていうか、僕と寿吹君だった。

「とつか、どうやったら良いのか見当もつきません」

「そうじゃそうじゃ！」

「どついう原理で現実になるのか全然分かりません」

「そうじゃそうじゃ！」

「つまり、どうしたらいいのかさっぱり理解できません」

「そうじゃそうじゃ！」

アホだな、僕ら。

「……お前は何か勘違いしているようだな。いいか、何か理由が有ったり、原理が働いて想像が現実に昇華するのではない。」

頭の中、外界の認識に直接現実を創るんだ。

間違っても、物理法則や常識のような正当で客観的な理由なんて必要ない。そんなものはむしろ邪魔だ。

網膜の裏に自分が望む光景を映せ。

それが現実であるのだと思ひ込み、一切の疑う余地を無くせ。見えているのは自分だけで良い。それがお前にとっての現実

『ファンリアル 幻実』なのだから。

意図的、意識的に『想像と現実の区別がつかない状態』まで持って行けと言っているんだ。なに、悩むことはない」

「え」

不意に顔を寄せてきた龍崎先輩は、硬直する僕の耳元で囁いた。

真面目で不器用で愚直な先輩が発したとは到底信じられないような、あまりに妖艶な声色での言葉、誘い。

「お前も、人間として壊れてしまえば良い。たったそれだけのことなのだから」

周りの誰にも聞こえなかっただろうその声に、僕の思考がついていけなくなってしまったのは、普段の僕と先輩の一種の友人のような関係を見る限りでは、当然のことだった。

「外界を改変する訳じゃない、内面を改革するだけだ」

次に聞こえたのは、皆にも聞こえるように見回しながら説明するいつもの先輩の声だった。

本来なら、逆に話の内容が入ってこなかったりしそうなものなのに、僕の頭の中は先輩の言葉を覚えてしまっていた。

忘れようとしても、忘れられないくらいに。

これによつて、僕はこの先、不安と疑念に苛まれることになる。

“この場所”が人をどう変えてしまうのか、という、そんな疑念に。

「よし、続きは明日だ。期限は三日後。その日の夜がお前達が脱出する唯一のチャンスだ。私が見張りの当直だからな」

倉庫の、扉を開けて。

「では、良い夜を」

先輩は、闇の中に消えていった。

それを、僕達は見つめていた。

涼しい夜風が吹き込んできて、壁に囲まれた箱庭でも風が吹くのだな、なんて、呑気にもそう思った。

「……扉、閉めていけよ」

西園君の一言に、僕は一人、盛大に嘖き出した。

『幕間・理由なき罪悪感』

僕は誰だろう。

僕は罪を犯したような気がする。

罪は償わなくてはいけないような気がする。

命は尊いもののような気がする。

人を殺すのは悪い事のような気がする。

悪い事はしてはいけないような気がする。

僕はどこか狂っているような気がする。

僕という存在が、軋みを上げているような気がする。

そんな、気がする。

僕は、誰だろう。

答えを求めて、人知れず、この街を漂うことにした。

新たな人形の踊る、箱庭の街を。

『black out』

第二章 『生徒会』 3 (前書き)

この部分からは、ときどき三人称視点や別のキャラクターの視点があります。分かりにくいかもしれませんが念のため。

第二章 『生徒会』 3

どうしても後悔したくなければ、目と耳と口と鼻と心を閉ざして永久に無知でいなくてはならない。
後悔のない人生なんて、道を誤らなかつた訳でもなく、ただ常に妥協しかなかったただけなのだから。

『明くる日の月』

約束の三日後。

最果学園の体育館倉庫を抜け出した僕達は、とくに日が暮れた、薄暗い玄関口の近くに集まっていた。

外に目をやれば、月がガラスの向こうから覗いているようだ。

龍崎先輩は、僕達六人をゆっくりと見回してから頷き、言った。

気分はもはや卒業式。

「よく頑張った。これで皆、立派な『アンチリアリスト反現実能力者』だ

そのの二名を除いて」

ただし、留年して卒業生を見送る者の気分なのだが。

「見送ってどうすんだよ。お前が来なきや意味がないだろうが」

西園君が励ましてくれている（？）が、小学生の問題を社会人が間違えてしまったような心境の僕には、あまり効果は感じられなかった。

普通はここ二、三日の修業風景的な何かを語るべきなのかもしれないが、生憎とそんなものはない。

だって、僕はまったく進歩していないから。それはもう清々しい程に。

語るべき内容は、一つとして無かった。

特に、僕の方は。

「訓練は続けておけ、才能はある。お前は大器晩成過ぎるんだよ、永久宮」

はいはい、心遣い痛み入ります。

「拗ねるな」

「拗ねてません」

「本当の話だ。見込みのない者に私が目を掛ける事など有り得ん」
いや、お人良しに言われても。説得力皆無です。

「ふむ……ここに来る前、気を失ったのが同じ時期なら、何も面白い話題はないのだな……」

このタイミングで、意識の外に弾き出していた事を持ち出してくる先輩。

「……フフ、私らしくもなかったか。見る、永久宮。

今夜はこんなにも、月が綺麗だ」

「ここに来て、隠し設定まで持ち出してきましたね……」
普段は真面目なくせに、実は隠れゲーマーな龍崎先輩。

RPGからADV、アクション、シミュレーションは勿論、シューティングにレーシング、音ゲー、格ゲーやギャルゲー……という
かエロゲまで。

どこで間違えたんだ龍崎球藻。

ある意味、アニメやマンガ、ネットなどにも幅広く手を出している
寿吹君よりデイーブに浸かっていたりする。

しかもそれを他人に隠さない辺り随分と男前（？）である。

良いのか西園伸一、君の父上は国家公務員だろう。

取り締められよ、この人。

「永久宮」

いつになく真面目な声の響きは、寂しさを紛らわす為に無理矢理

意識を高揚させていた僕に、冷水を浴びせ掛けた。

「お前達も、力は使い過ぎるなよ」

そう、幻実を創るのには限界がある。

夢の能力には、当然のように副作用ともいえる代償があったのだ。力の訓練を始めて最初に教えられたのは、あまりにも重過ぎる真実だった。

現実とは、自分がアイデンティティを置く認識のこと。あくまで、感覚器官から取り入れられた他の情報と比較検討し、優先順位の高い情報を現実であると思い込んでいるだけ。

人間とは、そんな仕組みで出来ているらしい。

つまり、現実が現実であるのは、他ならぬ自分がそう思い込んでいるからである、ということ。

ならば、現実は自分で決められるのだ。

現実より優先順位の高い幻実を創れば、それが現実に取って代わる。

視覚、嗅覚、聴覚、味覚、触覚　　現実よりリアルな幻は、

現実よりも現実的で、幻が現実を凌駕する。

それを創る為に、瞳孔を大きく開き、外界から通常の数倍以上に比する光情報を取り入れているらしい。

『　醒めない夢は現実と同じ　』

だから力を使うと瞳の焦点がブレる。幻実を認識する過程でより多くの外界情報を取り入れる為に瞳孔が開くことが理由だが、それは眼、ひいては脳に過負荷をかけることでもある。

使い過ぎれば軽くて失明、中程度の後遺症でさえ、思い込みが激しくなったり、疑心暗鬼になる。酷くなれば精神崩壊や人格の豹変を招き、最悪死ぬことになるのだった。

そうして死ぬことも出来ず、自分が狂っている事にすら気づかないでこの街をさまよっている人間は多いのだという。

皆を先に敷地外に行かせ、僕は遅れて外に出た。

外に出れば、月が煌々と輝く夜だった。

寒々しい月明かりを一身に浴びて、龍崎毬藻はそこにいた。

「本当に行くんだな、永久宮」

「ええ、僕は行きます。自分でも止められないんです」

「……また、最初のように殺されかけるかもしれないぞ？」

答えは、始めから決まっていた。

僕はずっと、そうやって生きてきた。

「僕は、変わらないモノを見つけない。世間一般の言う普遍的な正義なんて、僕みたいな人で無しにとつては価値がない。例え殺されることになっても、そんなモノには従えない。死を選ぶことになっても、僕は逝きます。」

それが、僕の名前だから」

それを聞いた彼女は、とつとつと語り始めた。

「……世界とは個人にとつての認識そのもの。自分にとつての現実と他人にとつての現実が、同じであるはずがない」

静かに、それでいて朗々と夜の闇に向けて放たれる言葉。

電力の供給されない現代の町並みを見れば、遙か過去と大差ないようにも思えた。

「私は……ふふ……時々考えてしまうよ。もしかしたらこの世に実在するのは自分一人で、他の人間は皆が皆、私の夢に出てくる登場人物なのかもしれない。」

……あるいは、私は真つ暗闇に一人ポツンと浮かんでいて、日常を送る幻を見ているだけなのかもしれない……とね」

ふと横顔を見遣れば、世を憐むようなその眼差しを、彼女は虚空の闇へと捧げていた。

これは、きつと独白だ。

やれやれと妙に大人っぽく肩を竦めて首を振って、言葉を続ける。「何を馬鹿げたことをとも思うが、困ったのは『それが事実ではない』と否定する手段がないということだな。この箱庭に存在する反^{ンチリアリスト}現実能力者達を見ていると……あながち、間違いではないという気にすらさせられてしまう」

彼女はもう一度だけやれやれと首を振り、最後に独りごちて呟いた。

「困ったものじゃないか……なあ、永久宮」

僕は、黙ったままでいるべきだと思った。

当然、しばらく黙ったままでいた。

「本当に……困ったものじゃあないか……」

周囲に遍在する夜の帳は、僕と先輩以外の何者も浮かべてはいなかった。僕ら以外の声すらも響かない。

「……なあ、なんでこんな事になってしまったんだろうな」

そんな闇に消えてしまいそうなくらい弱々しい声。

僕は、先輩がこんな声で話すのを聞いたことがない。

少しだけ、戸惑った。

何が、とは聞かない。

そんなこと、わざわざ聞くまでもない。

「それは　僕達を襲って、人を殺した男、御剣暗人　いえ、

暗人先輩の……ことですね」

そうだ、僕はあの男の事を知っていた。

あまりに性格が変わっていて気づかなかった　否、気づかない

フリをしていた。

あの優しかった先輩があんな事を言っているのを聞いては、別人だとしか判断できないだろう。

本当にお人良しな男だった彼が、見る影も無かった。

それでもあの人は、僕の恩人で、龍崎先輩の友人だ。

「アイツは、力を使い過ぎたんだ。私達を護るために戦って、戦い続けて……気がついた時には、もう手遅れだ。アイツは、あんな事

になっていた。全部、アイツに戦う事を押し付けてしまった私達が悪いのにな……」

助けてくれと、言いたい筈だ。

救ってくれと、言いたい筈だ。

なのに、弱音を吐かない。

僕が頼りないのは、理由ではない。

そんな贅沢を言えるような、余裕なんてないだろうに。

余計なモノを背負わせたくない、巻き込みたくない、そんな理由で他者を頼らない。

それでも龍崎毬藻は、ただの一人の少女なのだと、僕は知っている。

それなのに先輩は、泣きそうな顔で、僕に言うのだ。

「なあ、永久宮。私は……もう、泣けなくなってしまったよ。泣くには、人を殺し過ぎた……」

自分の中で、ようやく微かな現実感を見つけた。

僕は狂っている。

不謹慎で、無作法で、非人道。

けれど自覚なんて、本当はない。

そういうフリをしているだけの、ただの抜け殻だ。

でも、そんな人間だけど、だからこそ持ち合わせている物もある。

目的が、できたんだ。

「僕は、あの人を殺すつもりなんてない」

死んだ人達と、遺された人達を侮辱してしまうかもしれない。

だけど

「 命の価値は全て、平等ですから」

それは、この世で一番残酷な言葉。

善人も、悪人も、等しく無価値で、しかしかけがえのない存在。

それが、僕がよりどころにしてきた言葉だった。

「……それじゃあ、行きます」

背を向ける。

今この場で慰められないのが辛い。

ただど僕みたいな人間には、他人を慰める権利なんてないから。

「……ありがとう、永久宮」

なにもできなかったような気がするけど、声の調子は戻っているようなのでよしとする。

「もしも適うならば……永久宮、お前と肩を並べてみたかったのだが」

「それは……どうも。でも大丈夫ですよ。死にさえしなければ、まだ機会はある筈です。機会があれば、また」

「フフ、その通りだ……今すぐでないのが本当に惜しいな……お前のような性格は私好みだ」

「買い被りすぎだと思えますけど」

先輩は、口に手を当てクスリと笑った。

「そういうことでもいいさ……さあ行け、見つかる前に」
その時だった。

「……っ!？」

僕の視界が、頭を掴まれたようにぐらりと揺れた。

視界に、ノイズが走ったような　そんな気がした。

身体が勝手に、後ろを振り向く。

そこにいた。

龍崎先輩が既に振り返った、その向こう側。

死に神のような、黒いロープ。

その姿は、まさしく影。

身体に巻き付いた幾本もの真つ黒なロープは引きずられながらも、その身体の女性的なシルエットを示している。

狂氣的に乱れたボサボサの髪には白髪が混じり、目の下の隈は、生まれてから今まで一睡もしたことがないかのように深いものだった。

「『骸』……なぜか貴様がここにいる……!？」

龍崎先輩の言葉で理解した。

こいつが、現状の管理者……『骸』であると。

よく見てみればこの街では見かけない、首輪すら着けていない妙齡の女性だった。

化け物のように不気味な出で立ちにも関わらず、そいつは口を開いた。

『……開幕を告げましょう……この悪夢から逃れる為の、戦いを……』

人の脳髓をジクジクと蝕むような、限りなく不愉快な声。そこには、耳を塞いでしまいたくなるような、悪質な力があつた。

意味が、分からない。

そう思った矢先、考えられる限り最悪の言葉が、そいつの口から放たれてしまった。

『……“永久宮逝人を殺した”ただ一人に、この地獄から抜け出る権利を与えよう……！』

言葉の意味は、すぐには理解出来なかった。

………なんだよ、それ。

なんで僕なんだ いや、そうじゃない。

コイツか。

先輩が悲しんだのもここから出られないのも人が死んだのもコイツか。

コイツの所為で……っ！！

「ハアッ！！」

一閃。

似たような事を考えていたのか、先輩が刀を横薙ぎにした。

剣術の師に『刀を斬る』とまで評された龍崎先輩の抜刀を、黒い影は事もなげに躲し、闇の中へ溶け込むようにして姿を消した。

心配すら、残さずに。

何の言葉すら、残さずに。

「不味いぞ、永久宮……なぜ、お前ばかりがこんなにも……」

その言葉の意味を読み取る事は出来なかったし、そこから先を聞

き取ることも出来なかった。

なぜなら

「……本当に不味いぞ、永久宮」

闖入者は、それだけではなかったのだ。

ざわり、という感覚。

素早く辺りを窺った先輩は、闇の中に潜む気配に向けて言い放った。

「……どういづつもりか説明してもらおうか、生徒会副会長殿？」
声に反応して現れたのは、一人、二人、三、四、五、六人の男女。

僕が最近まで着ていたこの学園本来の制服を着た連中が、僕らを取り囲むようにしていた。

思い出すのは、あの日目が覚めてから体験する羽目になった最初の襲撃事件。

嫌な感じしかしない。

と、先輩の声に応える人物がいた。

「どういづつもりか、だと？　それはこちらの台詞だよ、龍崎委員長」

周囲を囲んでいた連中が割れた間から現れたのは、どこか神経質そうな、眼鏡をかけた目つきの鋭い男だ。

左の二の腕には、龍崎先輩と同じ生徒会の腕章。

よく見れば、周りの学ランやセーラー服達も、同じ腕章を身に着けている。

「君が行ったのは、敵対行動をとる恐れのある人物への援助行為
立派な裏切りだ」

なるほど……独善的、ね。

龍崎先輩がここに来た時に言っていた事を思い出して舌打ちする。
「勧誘失敗しただけだ。戻ってくる可能性がある以上、有能な人材を潰すのは損失ではないか？」

今、非常に不味いことになっている。

先輩と副会長の言い合い。

しかし、僕の記憶が正しければ、生徒会副会長

たかまるみきひさ
鷹丸幹久先輩

は、頭が堅くて話し合いにもならない人種だ。下手に頭が回るのも性質が悪い。

「戻って来ない可能性の方が圧倒的に高い。他所に与えられる位ならば、いつそこで不安の芽を刈り取った方がまだマシというものだ」

「そんな理由で殺すのか？ それとも……」

問いかける先輩。

「……そうまでしてここから出たいのか？ 人を殺してまで？」

「勘違いするな、龍崎君。これはあくまでも敵の排除だ。例え一人だけ生きて出られても、何にもならんからな。それに、無理に殺すつもりはない。食料に余りがあれば、許す限り分け与えてもいい。もつとも」

それは、足りないぐらいなのだがね と、彼は言った。

男の真意は分からない。

が、捕まれば僕は生き延びられない。

先の骸の話は生徒会にも伝わっているようだ。ならば、他の人間が約束を守るかまでは分からない。押さえが利くとも思えない。

というより、自覚があるのか分からないが、この食えない男は性格が悪い。そもそも信用に値しない。

そしてそれ以上に。

しかし、思考は妨げられる。

輪の外に僕を突き飛ばす龍崎先輩。

「今の内に行け、永久宮っ！！」

「だけど……っ！」

逃がさないというように、二人の学ランがジリジリと迫る。

「いいから行け！ ……私は、問題ない」

先輩の繰り出した蹴りが、僕を取り囲んでいた二人を引き剥がした。

くそ、どうにもならないのか……！！

噛み締めた唇から鉄の味がするが、今はそれ所ではない。

「お前に任せると言っている！ 行け、永久宮逝人ッ！！」

その言葉を聞いて、僕はすぐさま駆け出した。

「追え、逃がすな！」

「私を忘れてもらっては困るな……！！」
進む金属音。

声が後ろから響いて来るが、なんとか足を止めずに動かし続けた。街灯も点かない暗い道を、皆がいる方に走った。

戻ることも、仲間を呼びに行くことも出来ない。

先輩の覚悟を聞いた後では、そんなことをしてはいけないと思っ
てしまった。

先輩なら死ぬことはないだろう。捕まりはしても、殺されたりも
しないだろう。

……それは紛れも無い真実であったが、今の僕には、空々しく響
くだけだった。

『 肅清・1 』

「……行ってくれたか」

永久宮逝人が駆け去った後に残された龍崎は、そう呟いた。

「しかし、意外と素直に行かせてくれたな、鷹丸。必死に止めに来
るかと思ったのだが。お前とコイツらがまとめてかかってくれば、
私に拮抗したかもしれんぞ？」

挑発ともとれる言葉に、鷹丸と呼ばれた彼はふむ、と頷いた。

「それは、一人で私達を蹴散らすつもりであった者が言うべき台詞
ではあるまい？ 随分と必死に叫んではいたが、通す隙すら見せな

かった女がよく言うものだ」

「事実として、私が負けるとでも？」

「ふん、違くない。だがまあ、どのような目論見があったにせよ、それは無意味だ。客員の同志、龍崎君」

ニヤリ、と口元を吊り上げる鷹丸には、余裕というべき何かを持ち合わせていた。

「かなみね金峯」

鷹丸が名を呼んだ時、既にその男 かなみねぎんれい金峯銀嶺の姿はそこにあっ

た。
「お待たせしました、副会長さん」

顔立ちは美しく日本人離れしていて、髪は生れついでの金紗。この男は、母方の家系にドイツ人を持つクォーターなのであった。

龍崎は、薄く笑んだその様子から、感情の色というべきものがいまひとつ感じられないでいる。

「かなみね金峯、なぜ貴様までここに……？」

龍崎は、目の前の男二人の思惑を計りかねていた。

「ああ、龍崎さん。簡単な話ですよ。当然今回の件は鷹丸さんが、我等が敬愛すべき生徒会長さんにご報告なされたのですが……」

「かなみね金峯、それは私への皮肉かね？」

この鷹丸幹久という男、未だ幼い生徒会長の人柄に惚れ込み、敬服した、まさしく忠犬なのである。

「いえいえまさか。失礼、ご気分を害されたのでしたら謝ります。……で、ですね、その会長が『互いに無傷で連れて来て下さい』

とのこととして。さすがにボクと副会長さんの二人がかりでなら、龍崎さんにも勝てますし」

一人では取り押さえられないので二人で。

理に適った話に、龍崎はようやく納得する。

「なるほど、自分の立場を悪くしなくては……」

三人で、頷く。

「ああ、おそらく」

「貴女が考えていらっしやる通り」

「ここで私はお前達を倒し、凱旋する必要がある訳だ　　！！」

金属同士のぶつかる音が高鳴り、重なり合い、交差してやがて、残響した。

『black out』

ああ、ああ、貴方はなぜ、これ程までに。

『後に立つモノ』

永久宮逝人と龍崎毬藻が骸と遭遇していた全くの同時刻。

有り得ないことに、学園の外で永久宮を待っていた西園伸一達五人は、黒い影　骸に遭遇していた。

『……“永久宮逝人を殺した”ただ一人に、この地獄から抜け出る権利を与えよう……！！』

聞いた瞬間、西園を内蔵の冷やされるような感覚が駆け抜けた。なんでアイツが……、と眉をしかめ、仲間達を見回す。

そして安堵した。

霧音島寿吹は自分と同じような顔を。

彩園寺真尋は人を護る決意をしたような毅然とした表情を。

苦道目王はなぜか物憂げな陰を翳していたからだ。

そしてなにより、永久宮と出会って最も間もない一人である
筈のマナという少女が、一番悲痛そうな表情をしていたから。

「失せる……化け物が、人様のダチに寄って来てんじゃねえよ！」
奇しくも同時刻に放たれていた龍崎による一振りにも勝る、大太
刀による一薙ぎ。

瞬時に幻実となった闘争本能の具現が、黒い影を跡形もなく引き
裂いた。

「……消えた？」

不審気に呟く西園。

「……許せません、逝人様を亡き者にしようとするなんて……」
命の恩人を槍玉に上げるような真似をされ、憤る彩園寺。既に消
えた影を気にも留めていないのは、少女の強さの表れと言えるだろ
う。

「何やら奇つ怪な事になってきたようじゃが、あやつは無事かのう。
久し振りに話の分かる奴に会えた訳じゃし、儂より先に逝ってもら
っては暇潰しに困るんじゃが」

「名前からして先に逝っちまいそうだけどにやー。ま、着いて行く
って言うてもうたし、ウチはただ着いて行くだけよ……キリッ」

効果音を口走ってドヤ顔をする苦道だが、重苦しい場の空気に流
されてしまった。

「……そろそろ来るか？」

それぞれは思いを新たにし、永久宮の帰りを待つのだった。

先の見えない暗さの中で、誰の耳にも届かない声が、宵闇に
薄く溶け込んだ。

「……どうして、貴方はそうなんですか……ユキト」

悔恨と逡巡、大切なモノが壊れていくのを目の当たりにさせられ
たような感情が、彼女の瞳に湛えられていたのを、ただ闇だけが覗
き込んでいた

幕間2 『Monomania』(前書き)

短いですが幕間その2です。

ちなみに、似たような文が何度か出てくるのは仕様です。

見直し中に本人さえ忘れて「あれ？ おんなじ事二回言ってる？」
ってなってしまうので一応。

幕間2 『Monomania』

『暗い闇、瀬戸際にて』

ピチャン。

真夜中の公園。

秋の田舎街だというにも関わらず、虫の音も聞こえない暗闇。招かれざる生物の侵入を許さないこの街の性質は、しかし虫籠と同じものだろうか。

ピチャン。

電力の供給がない故の暗さは、まるで街が死んでいるかのような眠りをもたらしている。

深く暗い、先の見えない混沌。

ピチャン。

そんな暗闇の中に、それはいた。

「う……………」

呻き声を上げ、ずりりと引きずるその体軀は水に濡れている。

首の辺りで返り血の如く黒ずんでいる、その身に刻まれたそれは、真正正銘の彼の銘。

朽ちた彼岸花のように、その身の至る箇所と同じ色を咲かせている。

もとい、その身の至る所は、赤く朱く裂かれていた。

「ぐ……ああ……」

男は思う。

痛い。

痛い……痛い。

痛みが、傷みを蝕んでいる。

何故こんなことになっているのか、男には皆目見当がつかなかった。

「どうして、オレがこんな場所に居るんだ……？」
分からない。

いくら考えたところで、答えはでないのだと諦めかける。

「確か……オレは、アレと戦って……」。

そうだ、毬藻は、皆は無事なのか……!？」

男は一人、疑問を抱く。

身体は、動きそうもない。

記憶は酷く曖昧だった。

自分は淡く蒙昧だった。

「確か……部下を引き連れて、帰還中だった筈じゃあ……」

どうして自分がここにいるのかと考えた時、ふと、気付いた。

脳裡を過ぎつたのは、自身を阻むセピア色の少女。

自身を責めるように歩み寄る灰色の少年。

そして 群青のような黒髪の剣士。

「……す」

誰だろうか。男は、自らの記憶の中には見覚えのない彼女達を見て、そんなことに首を傾げた。

「……してやる」

あるいは、親友である男の妹である少女のような。

あるいは、自らが弟分のように可愛がっていた後輩である少

年のような。

そしてあるいは、理知的だけれど不器用な、兄妹のように育ってきた幼なじみのような。

そんな雰囲気をした彼らを、知っているような気がした。

「必ずだ……」

ああ、そうか。思い出したよ、毬藻、逝人。

「龍崎、毬藻 永久宮、逝人」

何故こんなにも大切な事を忘れてしまっていたんだろう。

お前達は、オレの大切な

敵、だったな。

その時、男は既に手遅れだった。

人の身で世界と戦い続けた代償は、手遅れな程に精神と記憶を侵食していた。

ピチャン。

ああ、何故オレは今まで、こんな大切な事を忘れてしまっていたのだろう。

「 殺す……殺してやる、龍崎毬藻、そして……永久宮、逝人オツ！」

男が月に咆哮した時、既に僅かばかり取り戻していた理性は、とうに失われてしまっていた。

躊躇いも優しさも……そして、理由すら分からない憎しみの対象が、自らがかつて護ると誓った『本当に大切なモノ』であるという事実さえも。

叫んだ。

常人であれば聞くに耐えないであろう呪詛の言葉を吐きながら、男の顔は憎悪に醜く歪んだ。

その眼から一筋の光が流れ落ちたのには、誰も気づかなかった。誰も、気づかなかった。

彼岸と雌岸の境目。

水際で生き延びた御剣黒人は、壊れてしまっていた。
その矛盾にすら、気づくことなく。

『black out』

月明かりの届かない暗闇で、黒い影は呟いた。

『……ついに、最後の
が揃った……』
そして。

『……全ては……ここから動き出す……』
その影は、三日月のように口元を歪める。

「Remember・1/1200000000」の力を……
…この世でただ一人の力をもって……」

現実を、迎え討て

『Daybreak』

第三章 『New Days』（前書き）

どうもお久しぶりです、工人です。

仕事が予想外に忙しく、かなり時間が掛かりました。しかもかなり文が乱れています……。

軽い急展開に見せ掛けて、次回からはのんびりと日常パートです。

第三章 『New Days』

『ユキト』

ここ最近夢を見ていた。

実に妙な夢。

この街に閉じ込められてから、ずっとだ。

僕と誰かが、何人もの人影に取り囲まれている夢。

龍崎先輩に相談した時には、『それは予知夢かもしれない』……
なんて言われた。

その根拠までは、教えてくれなかったのだけれど。

夕闇の中。

外界を遮絶。意識を集中して内面を探る。

『永久宮逝人』を形作る、その内側に潜り込む。

マージナル
外界と内界の境目。脆い殻インサイドの中身。自分の壁レンデートル。

擬似“事象の境界面”。

更にその内側へ。

……そうして辿り着いたのは、意識の中心を突き抜けて更に反対側の表層。浅くない筈なのに浅い部分。心の最奥にあるにも関わらず、同時に最もあやふやな部分。

羊水に揺蕩うような。

靄ほみやの中を漂うような。

そんな暖かさを感じている。

人の中枢に芯は無い。不定型の何かが渦巻いているだけ。

それは水のように澄んでいたり、様々に色付いていたり、あるいは濁りを見せる事も時としてある。

それを、両の手の平ですくい取る。

慎重に。

慎重に。

ゆつくりと。

それを自分という殻の内側にブチ撒けて、スクリーン殻の内面に幻実という自分だけの世界を描く

「……駄目か」

止まれ。冷却。失敗した。

現実にすが縊れ、戻れなくなる前に。

「やっぱり出来ない……」

武器の幻実をイメージ想造するのは、基本中の基本なんじゃないのか……？
だというのに、すくい上げた自身の一部が幻実を描くどころか、すくい上げた端から指の隙間を零れ落ちてしまい、武器のイメージすら出来やしない。

皆と一緒に先輩から教わった精神鍛練を繰り返してはいるが、未だにアンチリアルウェポン対現実兵器のイメージ想造には成功した試しが無い。

……今は少しでも力が欲しい。もう二度と、あんな事にならないように。

そんなことを、考え込んでいると。

「……“見張り”が考え事なんて、少し緊張感が足りないんじゃない、ユキトさん？」

「……うわ、ごめんなさい」

はっとして振り向いた先にいる声の主は、咎めるように僕を半眼でジッと見ていた。

「……今帰ったわ」

「逝人様、お疲れ様です。彩園寺真尋、ただいま戻りましたわ」

「お帰り、マナさん、真尋ちゃん」

ふと気づけば、辺りはすっかり暗くなっていた。

この場所は御旗市西北区に隠れて存在する、とある一大家具メーカーインテリアの所有する地下倉庫群の入口だ。

……龍崎先輩と別れたあの夜から四日。僕達は、彩園寺真尋ちゃんママの母親が管理していたというこの倉庫に隠れて、周囲の情報を手分けして調べている最中だった。

「（……こんな状況なんだから、もう少し心配してくれても……）」

「（……ダメですよ、だいぶ“外れて”いらっしやる方ですし、もっとストレートに言わないと……）」

「え、なんて？」

何やらブツブツと呟いていた様子のマナさん達に聞き返す。うまく聞き取れなかったんだけど。

「なんでもない」

「なんでもありませんよ」

しかし軽く一蹴されてしまったので、首を傾げながら二人を扉の中へと促した。

確かに、見張りが思索に耽っていても意味がない。反省。

まあ、それはいいとして。

既に中には西園君達も居る。

僕は、探索に出たマナさん達の帰りが遅かったのが気になり、寿吹君に頼んで見張りを代わらせてもらっていたのだった。

「さて、どうなることやら」

独りごちた後、誰にも見られていない事を確かめて、扉を閉めて鍵をかけた。

電気のない地下は余りに暗いが、皆が龍崎先輩に持たされた荷物に入っていたマッチで、ランプに灯火を起こして階段を下りて行った。

その先にある、倉庫の扉を開ける。軋む金具の悲鳴は、荒涼とした荒野の真ん中に僅かだけ取り残された文明の跡が掠れた声で叫ぶような、どこと無く哀愁に似た何かを感じさせた。

『自戒』

転ばぬ先の杖。

僕が夢を見ることは許されない。絶対に。

この地下倉庫の入口は、普通のビルの内部にある。

倉庫という名に相応しく、搬入用エレベーターで運ばれてきた家具を放り込んでおく為の内装も何も無い物置のようだが、電力が来ていない為にエレベーターも動いていない。

ビルの中にあるトイレや水道等は水が出るが、他は確かに全滅だった。

地下倉庫の中、僕達は今、積み上げられた家具の上、それぞれがソファーやベッド、デスク等に腰掛けている。

「本当に助かったよ、真尋ちゃん。感謝してもきれないくらいだ」「構いませんよ、逝人様。……………いずれ、貴方様の身体で支払って戴きますから」

「……………なんですと?」

「天井の染みでも数えていて頂ければ。優しくして差し上げますので」

「……………え」

「……………え?」

なにそれこわい。

前から疑ってはいたが、今の発言で確信した。やっぱりこの子、変態だ。

まあ、それはともかく。

今、僕が腰掛けているのはダブルベッド。ジャンケンの末に一週間勝ち取った（相手は寿吹君だけ）戦利品だ。広いのはただそれだけで素晴らしい。

マナさんが好んで使うのは大型ソファ。何故か眠る時もこれを好み、なんと膝を抱えた座りのまま寝たりする。なんでも、横になると頭に巻いた右目の包帯が解けて嫌なんだとか。ベッドを使うように言っても断られた。いつでも使ってくれと皆は言ったのだが、未だその気配はない様子。

西園君や寿吹君、苦道さんは普通のベッドで寝ている。とはいえ、どれも一般人に手が出るような代物ではない。

ちなみに、苦道さんはたまにコンクリートの床に直接寝ていたりする奇行が目立った。

本人いわく、『ウチ、寝相が悪いんだにやー』とのこと。ふざけてやがる。

例外は真尋ちゃんだ。なにせこの場所の提供者は彼女。全て彼女から借りている状態であると言っても良い。好きにする権利があるということと落ち着いたが、一度だけ僕が目覚めた時に彼女が僕の布団に潜り込んでいたという事件があった。

あれはビックリした。ていうかドキドキした。筆舌に尽くしがたい。なぜそんなことをしたのかと皆が問い詰めたが、結局うやむやにされてよく分からない。なんだかんだでまた僕の足がマナさんに踏まれることになっていた。怪我が治っていて幸いだ。

真面目な話だが、最初の襲撃事件があったあの運命の日から、なぜか怪我の治りが妙に早い。事実この一週間だけで、ヒビの入っていた肋骨や内臓のダメージがほぼ完治している。

僕だけではなく、人質に取られた真尋ちゃんの首の微かな切り傷も、翌日にはなくなっていたような気がする。

あの日の空想を元に考えれば、時間の流れ方が違う　つまりは

時間が速い、のか？

理由までは分からない上、確証とてないが。

この分では、“彼”もまた、命を繋いでいるかもしれない。

……既に“あの夜”から四日程が過ぎた。龍崎先輩から渡された僕らの糧食は、とうとう尽きかけようとしている所だった。

「缶詰はナシ。もうカリーメ　くらいしか残ってないな……」
　　呟く西園君。

覗き込んでいるのは一つの黒いリュック。あの時は暗くて気づかなかったが、龍崎先輩が西園君達に渡していたらしい。どうやらそういった道具などの類は、街のあちこちに手付かずに残っている物もあるようだ。ここの家具のように。

食料は残量を見るに、おそらくは持つて二日といったところだろうか。

「……ところで、それはそこまでして隠さなきゃいけない商標なのか？」

上の僕の発言から、西園君、寿吹君、そしてまた僕に戻る会話がコソコソとしばらく続く。

「過半数の文字を残せば何なのかは分かるだろ」

「メタな発言はやめるのじゃ」

「メタとか言っちゃうこと自体がメタじゃない？」

「お前は今の“言^いっちゃう”を“逝^いっちゃう”に言い換えるくらいのキャラ立てをしなきゃダメだな」

「中二じゃな、流石にそれはやめい」

「ぎくっ」

「……分かり易いな、もうやっちゃまったのか」

「じゃな……『ダメ、イっちゃう！』……なんちゃって」

「死ね」

「死ねよ」

「すまんかった」

……以上、男三人の馬鹿会話。

それを見計らったかのようなタイミングで、見かねたのか空気を
読んだのかは分からないが、マナさんが割って入る。

倉庫の真ん中に置かれたランプの灯が揺らめき、壁に伸びた影が
水面に映った逆像のように波打った。

「それより、はーちゃんの姿が見えないのだけれど」

「はーちゃん？」

誰ですかその愉快的な名前は。

「あ……ええと、苦道さんのことよ」

なるほど……って、なんで『苦道目王』が『はーちゃん』になる
んだろうか？ お茶目すぎるよ、マナさん……。

……いやそれはどうでもいいとして。全然関係ない話だが、確か
に不安だ。

「……ふむ」

コソコソと再び西園君達に話しかける。

「関係ないけどさ、あの最初の時に苦道さんを起こしたのって西園
君だっけ？ いまいち覚えてなくてさ」

「ん？ いや、違うぜ。多分、お前が起こした中に居たんだろ。動
転して気づいてなかったんじゃないか？」

少し思案した後、西園君はそう結論付けた。

「……ふうん」

そっか……へえ。

「かもね。あの“濃さ”に気づかなかったのは一生の不覚だけどさ
」だよな……」

不安といえは不安　そう思っていたんだけど、あの人が居ると
お巫山戯ふしやげが過ぎて真面目な話ができない気もする。

かといって放置しても良いかと言えばそれはノーだ。あの日の事
を思い出すと、目を離れた隙に誰かが殺されていた、なんて事態も
おかしくはない。そんな状態で安心できるほど、僕は脳天気ではい
られそうもなかった。

……だけど直後、そんな心配は杞憂であることが判明した。

「たっだいまー、諸君！！ 我、帰還せり、なんちゃって！」

脱力した。身体から骨が抜け落ちるような不快感。軟体動物つて
すげーな、なんて、不覚にも考えてしまうほどだった。

「それは不覚過ぎないかにゃー」

「誰の所為だ、誰の」

マナさんは眉をひそめて苦道さんに問う。

「苦道さん、今まで何処に？ 皆……………ええと、皆で心配して
いました」

「その間はなんやねーん……………いやいや、そないな事よりもっ！」

ガサガサと音を立てて取り出したのは一枚の紙切れ……………地図？

「じゃーん！ 街の地図最新版でえーすー！！」

ぱちぱちー、と一人拍手をする彼女に、啞然とする皆。

「……………あの、苦道さん？ 貴女、一体どこからそんな素敵な代物を
……………？」

戸惑っているのは真尋ちゃん。それはそうだろう。喉から手が出る
ほど欲しかった重要アイテムを、そこら辺から拾ってきたように
あっさり出してみせたのだ。

これがあれば街の把握もでき、大抵の事が分かるのだから。

「はい、ボス。ウチの代わりに預かつつて欲しいにゃー」

……………つて。

「……………なんで、僕に差し出すんですか」

「だーつてえー、ウチらのみいんなキミに着いてきたんやで？ キ

ミがナンバーワンだ、ゆきつち」

ゆきつち止めい。

「それは非常にメタかつ作者の独りよがりなネタになってシラケる
からやめてください」

「

「……………あの、逝人様。作者というのは……………」

「真尋ちゃん！」

「は、はい……………！」

「……僕、今何か言ったかな？」

……。

「い、いえ、何も！」

「よろしい」

「何をやっとするんじゃないよお主らは……」

真尋ちゃんとコントをやっていたら、寿吹君に呆れられた。

「……まあとにかくさ、僕はそういう柄じゃないよ。矢面に立つような人間とは違う。僕にそれだけの事はできない……脇役だからね」

悩むような事ではない。

躊躇うほどの物でもない。

むしろ役者不足にもほどがある。

役不足の間違いではないのが口惜しいが。

「西園君がマナさん辺りに任せるのが最適だと思う。それにそれに何より。」

そう、何よりも。

「だってほら 僕って、皆の敵らしいし」

……つい、言ってしまった。

言いたくないと思いつながら、誰に急かされた訳でもないのに言ってしまった。

あの夜から、ただの一度も口にしないでいた事を。

皆が皆、僕に気を遣ってか口にしないでくれた事を。

ただ一つの現実、僕が殺される未来を。

そして、誰かが裏切るのではないかという漠然とした 否、目に見えて淀み、鬱屈とした 懷疑と不安を。

「っていつかさ、なんで皆、僕を殺さないの？」

それは、素晴らしい思いつきのようには思えなかった。

“誰かに僕を殺してもらおう”。

もしかしたらそれだけで、誰か一人が助かるかもしれない。

あの“骸”を信用できるかは別として、この悪夢みたいな現実から抜け出せる可能性があるのに。

両腕を広げて皆を見る。

皆は揃って僕を見ている。

……おかしいな。なんで僕はこんな事を言ってるんだ？

口にするつもりなんかなかった。命が惜しいつもりなんかなかったのに。

けどそれなのに　それでも、この不安だけは、紛れも無い本物じゃないか

「抵抗しないからさ、殺せばいいだろ。そうすれば」

パン、と音がした。

耳元で響いている。

酷く乾いた音。

視界が右に九十度傾いた。

……だけど正直な話、僕には何が起きたのか、すぐには理解できなかった。

一瞬遅れて。じわり、と左の頬に熱が灯ともった。

頭の中は真つさらになってしまふ。衝撃が、頭の中の悪い寒気を吹き飛ばしたかのようにだった。

ただひたすらに熱いだけの頬に手を添え、視界を左に九十度。

前に、視線を戻す。

「　　」
目の前にいるのは、肩で息を荒くし、右掌を振り抜いたままのManaさん。

ここまですれば、混乱した頭でも分かるうつというもの。

どうやら僕は、Manaさんに殴られたらしい。

何故？

どうして？

……分らない。

彼女は、俯いて震えている。

僕は、喉に言葉を詰まらせている。

と、肩を叩かれる感触。

左を見遣れば、そこには肩に手を乗せた西園君がいる。

こちらを見ずに、僕の横を通り過ぎて地上への階段へ向かって行く。

今度は、右肩を叩かれる。

西園君とは反対の動きで、寿吹君が階段へ。

再び、左肩を。

苦道さんが階段へ。表情は、見えない。

最後に真尋ちゃん、困ったような顔でペコリと頭を下げて出て行った。

先程から静まり返ったままの室内には、僕とマナさんだけが取り残されている。

まだ右腕を広げて呆けている僕は、あまりにも滑稽に見えることだろう。

俯く彼女の表情は見えない。

だが やはり、泣いているような気がしてならなかった。

……震える声が、聞こえた。

「皆……皆、貴方の為に着いてきた。貴方に、命を救われた……」
普段の僕なら言っていた筈だ。

『そんなこと、頼んでない』

それなのになぜかその言葉は、僕の心に響いた。有るか無いかも分からない、あやふやな筈のそれに。

確かに、響いていた。

「なら 貴方は生きて下さい。命を大切にして下さい。私が貴方を守るから。この世界の誰もが貴方を殺そうとしても、私だけは貴方を護るから」

顔を、上げた。

「だから」
「やっぱり泣いている。
瞳に涙を湛えている。
目が赤く腫れている。」

それが酷く暖かく思えて、僕は罪深さを覚えた。

「だから、自分を殺せなんて言わないで下さい、ユキト……っ」

「マナ……さ……」

僕は馬鹿だ。

人でなしでロクでなしだ。

不謹慎で、無作法で、非人道。

不器用で、無神経で、非常識だ。

なんでこんなに優しい人を泣かせてしまっただ。

なんで彼女との約束を果たさそうとしなかったんだ。

なんで死んでも良いなんて思ったんだ。彼女の為だなんて、傲慢な嘘まで自分についたりして。

馬鹿だ。ああ、馬鹿だ。

忘れないように、マナさんに頭を下げなくちゃいけない。

彼女との約束が、今の僕の全てだから。

「有り難う、マナさん。皆にも、謝ってくる」

それだけ言って、背を向けた。

トン、と背中に軽い衝撃。

当然、マナさんしかいない。

「あの、マナさ……」

「ユキト」

言葉を遮って名を呼ばれる。

「……何かな」

「お願いです、ユキトさん。貴方を　ユキト、と。そう呼ばせてもらえませんか……？」

ゆっくりと首だけ振り返り、こちらを見つめるマナさんと目が合

った。きっと、今までは彼女の頭が背中当たっていたのだろう。

彼女の目つきは、冷徹だった。

彼女の口許は、辛辣だった。

彼女の長髪は、清廉だった。

マナという少女は、二面性を持っている。

冷たさと温かさ、相反する二つを。

外見も、纏う雰囲気も冷たく、鋭く、伶俐で、しかしそれと同時に対極でもあった。

本来なら他人を寄せ付けないような、冷気だった。

しかし 暖かい。

彼女が瞼を綴じれば神々しかった。

隣に並ぶだけで安心した。

前に立てば凜々しかった。

後ろにいれば可愛らしいのだと、今さっき知った。

その全てに、僕は見惚れていた。

僕にしてみれば、それらは暖かかさ以外の何物でもない。

きっとこれは、生まれて初めての恋なのだ、そう思った。

なんだ、僕も人を好きになれるんじゃないか

その時ふと、脳裡を何かが過ぎった。

学校の帰り道、僕は誰かと話している。

「…………… だって？」

「うん、。 ねえ、。 に行こうよ。 ねえ」

「…………… ダメだ。 だって、僕達は」

「ユキト、さん？」

マナさんの声に呼び戻される。

臃げなそれは、呆気なく霧散した。

何か思い出しそうだったんだけど……………。

彼女の可愛らしい顔、セピア色の髪と瞳をみていたら、どうでも

よくなつてしまつていた。

……何となく、胸が刺すように痛んだ。

「 やっぱり、ダメ？」

ダメじゃない、と言いそうになつたのを堪えて……堪える理由がないことに気がついたので、言つてみることにした。

「別に、ダメつて訳じゃない。でも、一つ条件を出しても良いかな？」

端正に整つた顔で、不安そうな表情をするマナさん。やっぱり可愛い。

……なんだろう、今まで色恋沙汰に興味がなかつた反動でもきたのだろうか？

彼女が愛らしくて仕方がない。

「……何？」

「いや、簡単な事だよ。

僕も、君をマナつて呼んでも良いかな？」

「……」

「……」

無言。

だけど、ただの無言じゃない。

「 ユキト」

「 マナ」

雰囲気だけで、言いたいことが伝わつた。

互いの名を呼ぶ。

しっかりと口に出して、呼び合う。

絆は、知らぬ間に育まれる。

そんな当たり前の事を、僕は再確認したのだった。

五分後。

「 マナ……」

「 ユキト……」

自分でもビツクリだが、まだ続けていた。

互いに名前を呼んで微笑むだけ。それだけなのに、なんだか嬉しくて仕方が無い。

ああ、きつと今の僕はニヤニヤしてすごく気持ち悪い事になっている。

「うふふ、ユキト」

「あはは、マナ」

「ええい、いつまでイチャついとるかこのバカツプルが!!」
突然背後から聞こえた声に、驚いて僕達は飛び上がる。

そこに立っていたのは、いかにも偉そうな風に腰に手を当てて仁王立ちをしている自称シヨタジジイこと寿吹君だった。

「こ、寿吹君!?!」

「まったく、出口に鍵が掛かっておるから出るに出不られず、それで戻って来てみれば……邪魔するのも悪いじやろうと黙って見ておればなんじゃ、いつまでもイチャイチャイチャイチャとイチャつきおつて! それとも何か? やはり儂への当て付けなのか!?!」

理不尽だ。ていうかひがみだ。

幻実の想造もやったことないくせに、既に思い込みの激しい奴だった。僕と同じで。

「ていうかイチャついてなんかいない」

「その通りです。私達は、共に戦う戦友の契りを交わしていた所だったのよ」

サラリと嘘を言い放つ辺り、彼女はやっぱり偉大だった。

……僕も、脇役なら脇役らしく生き延びて見せるさ。

ということとは、もっとギャグキャラ化する必要があるってのか?

……怖いから止めておこう。ウチはギャグキャラ足りてますんで

「うぬ? 何故こつちを見るのじゃ、永久宮氏」

「氏って言うな。……なんでもないから、気にしないでくれ」

ぬう……、と納得したようなしなやかな呻き声を上げて、そのまま寿吹君は黙り込んだ。

「んじゃ、とつと寝るに限るにや」

「ははは、格好つかなくて悪かったな、逝人」

「……………むう」

何故か真尋ちゃんがむくれているが、さっさと残りの三人も戻ってきたので、明日の予定を決めてから寝ることにした。

「……………うん」

今のこの街では大変な貴重品であろう柔らかいベッドに寝転んでからしばらくして。

マナと同じ部屋に寝ていることを、出会ってから一週間、八回目の就寝でようやく意識し始めた自分に心底呆れる。

けれど、それすらどうでもよくなるほどの心の温かさに浸ってられる事が、僕はこの上なく、嬉しくて仕方がなかったのだった。

「……………ありがとう、マナ」

予想外の返事。

「……………どういたしまして」

約束、必ず守るから。

必ず 守るから。

そしてもう、君を泣かせない。

『予知夢・崩壊風景』

龍崎先輩から聞いたこの街の話に、首輪についてのものがあつた。

「この忌ま忌ましい首輪は私達に刻まれた銘だ。誰の仕業かは分らんが、本人の対現実能力者としての特性を端的に表したような単語と数字が刻まれている」

「……………特性を表す単語、ですか？」

「あくまで確証が有る訳ではないがな。まず間違いないだろう。これを見て相手を判断するのはここでは定石だ。見せただけで敵に逃走を選ばせるような忌み名、二つ名として通っている輩もいる程だよ」

そんな話を聞きながら、まるで気づいていなかった僕は首に手をあて、指先で首輪をぐるりと撫でる。

すると、確かに指先は右の首元の辺りに凹凸を感じてとった。

「もっとも、数字の意味までは分からなかったが。困ったことに、こいつはちよつとした暗号だよ。」

“銘”は鏡に映すか、信用できる人間にでも見てもらえ。そしてソイツにだけそれを明かせ。それは弱点を推測する材料にもなるからな」

その言葉を聞いて、ならばと先輩に見てもらおうとするが、その前に続けて言われた言葉に何かが引つ掛かった。

「ちなみにお前を信用しているから教えておくが、私の銘は
conduct . 75 / 120 , 000 , 000 だ」

どこかで、なにか、聞き覚えがあったような……。

……駄目だ、思い出せない。

もしかしたら、無くなつた記憶の中にあつたのかもしれない。が、それを思い出すのは不可能のように思えた。

「そうだ、なんの脈絡もない話で悪いが……そういえば、妙な夢を見ると相談してきていたな……武器を出せない代わりに、もしかするとお前には未来を予見する夢を見る力が備わっているのかもしれないな」

「……ええと、なんで分かるんですか？」

「なんとなく、な。お前にもその内分かるさ」

「なんとなく、って……」

答えはついに貰えなかった。

その後、結局僕は対現実兵器アンチリアルウェポンも創れず、夢も見続けていた。そしてあの別れの夜、龍崎先輩の言葉の正しさが証明されることになったのだった。

あの夜の後からは、大人数に囲まれて先輩が戦った後からは、僕は違う夢を見るようになったのだから。

『black out』

『落日果実』

翌日。日が昇ると同時に、僕らは行動を開始した。

六人がそれぞれペアになって、三組で活動する。

戦力的なバランスを考え、おそらく戦闘能力が最も高い西園君が寿吹君に、同じような理由でマナが僕にそれぞれ付き、余った二人

つまり特に戦闘経験の浅い真尋ちゃんと苦道さんがペアを組むことになった。

ちなみに、何気なく西園君と真尋ちゃんの仲が悪いという新たな事実も考慮されていたりする。

目的はそれぞれ、西園君達は周囲に他勢力がないか調べるいわば斥候せっこう。真尋ちゃんと苦道さんチームが地図と街並みの照合、ついでに食料が無いかの調査。

まるで戦争でもしてるかのような役割分担だ。

そして当の僕達は

「ふぁ……眠いな……」

空に向けて、欠伸を一つ。

青空の下、二人で草むらに寝転び休憩していた。

「暇なのは仕方ない。皆も、誰かが見張りをしていないと、住み処

から安心して離れることさえできないもの」

「でもさ、重要な戦力であるところのManaが待機で良いの？ 僕なんかを守るより、探索に回った方が良いんじゃない……」

「確かにそうだけど……言ったじゃない、私」

「……？」

「『この世界の誰もが貴方を殺そうとしても、私だけは貴方を護るから』……って」

「……ありがとう、Mana。だけど、僕も強くななくちゃダメだな……。お姫様に守られる騎士じゃあ、本末転倒だしな……」

僕がそういうと、Manaは顔を赤くして俯いてしまった。
どうしたんだ？

心の中で首を捻る。実際には、Manaを見てパチパチとまばたきを繰り返していただろうか。

しかし大丈夫。僕は気遣いができる人間ですから。

……か、勘違いしないでよね！ べ、別にこの間のベッドに潜り込まれた事件の時に真尋ちゃんが辛辣な感じで吐き捨てた、……

……朴念仁』って一言を引きずってる訳じゃないんだからねっ！

……なんて冗談はいいとして。

ふむ。熱が有るように見える。

「……風邪？」

「……ユキトの馬鹿、朴念仁」

OK、KO。

参りました。

もういいよちくしょー。

「はぁ……」

溜息。

その時、一陣の風が吹き抜け、Manaが右目に巻いた包帯を静かに揺らした。

「ねえ……死んだ人間も、夢を見るのかしら？」

マナさ…………… マナがふと、急に、しかもそんな突拍子もないことを聞いてきた。当然、ごく普通の男子高校生である所の僕にその意図が読める訳もない。

「……さあ、僕には分からない。ただ、もしも死んだ人間が夢を見るなら……きっと、凄く退廃的な酷い夢になるのかもしれない」

答える為に何気なく思考を巡らせ……僅かな逡巡の後に、答えなんか出してもしょうがないことにようやく気づいたので、その途中で思い付いたことを口にした。

「ん……どうして？」

「死んだ人間が夢を見るんだとしたら、それは『未練』が有ったってことじゃないか？ だから、夢を見て救われたいんじゃないかな……………」

例えば、多分、万が一、とかの言葉が付くけど。

「ふうん……そっか」

棒読み気味な相槌。

「じゃあこの世界は、一体誰の見た夢かしら？ 私？ 貴方？ それとも、誰か？」

彼女の言葉は、僕には少しおどけたように聞こえた。こんな状況なのだから、これくらいの軽口は仕方がないと言えば仕方がないことだろうけれど。

僕だって、マナがいなければとうに頭がおかしくなっていて不思議じゃない気はする。彼女の傍に居るだけで心に安らぎを感じているのが、呆れるほどに自分でも分かる。

そういう意味では、僕はマナに救われているのかもしれない。依存しているのかも、しれないが。

人が人を殺す、外界から隔絶され閉鎖された街。

あまりに酷い世界観。

それでも。認めたくはないけれど、それでもこれは、紛うことなき現実だ。

「いやいや、僕はまだ死んでないって。どうしたのさ、急にそ

んなこと」

「うん。龍崎……さんが言ってたでしよう？」

『世界は個人の認識そのもの。自分にとつての現実と、他人にとつての現実が、同じであるはずがない。私は時々考えてしまうよ。もしかしたら、この世に実在するのは自分一人で、他の人間は皆、私の夢に出てくる登場人物なのかもしれない』

「いつの間にか……もしかしたらこの世界も、誰かが見ている夢なのかも……なんて、考えてしまつて」

……聞いてたのか。いや、あの人気が配を見逃す筈もないし、先輩が聞かせてたんだろうな。

「あるいは……誰かが見た夢、かもね」

「なに、それ？」

「ハハツ……僕にも分からない」

ほんと、何言つてんだか。自分でもサツパリだ。

でも彼女が言っている事の理屈は分かる。

彼女が伝えたかったのは、『今この瞬間、自分の見ている景色が現実であることも夢であることも、確かめる方法なんてない』ということ。

区別がつかない。

つまりそれは、区別なんかないのと同じだ。

今の僕にはそれが解る。

解つて、しまう。

それがどれほど恐ろしい事で、アイアンティティ人間を冒す毒なのかが。そんな

こと、誰も一気づかないフリをしている（くちにしない）だけで、そこらに当たり前のように転がっている味気無い猛毒しんじゅうだというのに。「まあ……どうでもいいんだけどさ」

その一言に傍らでクエスチョンマークを浮かべるマナに苦笑して見せ、静かに見つめ合っていた。

こんな事をしている状況じゃないと分かっている筈なのに、僕の脳内は現在絶賛お花畑だ。

相手の気持ちを確かめようとしていないのがせめてもの自粛だと思いたいが、この分だと気持ちを確かめるのが怖いという可能性の方が濃厚かもしれない。

……いや、それも少し違うか。
きっと興味が無いんだろう。

僕って、だいぶロクでもない奴だからな。返事なんて初めから求めてないのかもしれない。自分が相手に感情を向けるだけで満足してる気がする。

ベタに言えば、恋に恋してる？

「……うわ、乙女すぎるな、それは」

マナに聞こえないように口の中で独り言。

気持ち悪い奴だな、僕って。誰からも共感なんて得られそうもない。

……やれやれ、まったく、何考えてんだか。

「……ねえ、ユキト」

「何かな、マナ」

何気なく投げ掛けられた声。

そこに混じっていた僅かな申し訳なさを感じた僕は、意図的に優しい声で先を促す。

「約束……したでしょう？ 私を家に、帰してくれるって」

「ああ、勿論。必ず約束は果たすさ」

当然だ。だって、それが今の僕の最優先だから。

僕の人としての尊厳よりも。

そして、命よりも。

「うん、ありがとう。でもね……」

もしかしたら私、嘘、ついてるかもしれない

マナは困惑しているような、あるいは申し訳なさそうな、よく分からない顔でそんな事を言った。

「嘘……？」

「私、家が分からないって言ったでしょう？ でも、本当は違う」

「
一息おいて。」

「 記憶が無いの。あの時より前の、名前以外の記憶がほとんど全部
」

無意識に息を呑む。

それを聞いて、僕は色々な感情がない交ぜになったものを感じた。その事実がどれほど人の心を蝕むのか、身をもって体感しているから。

だからこそ、その上で正気を保っている事が信じ難い。

……嗚呼、僕は何を悩んでいたのだろう。

たかだか気を失う直前の記憶がないぐらいで、一体何を。

もつと大変な思いをしている人物がすぐ隣に居る状態で、何を問の抜けた事をやっていたのか。

「……なら、僕のやる事は変わらないよ」

約束、したじゃないか。

「君を家に送り届ける。その為に記憶が必要なら、それも引つくるめて一緒に探そう。これは、僕の誓いだ。命を救ってくれた君に、精一杯の恩返しだ。……僕は君を、守る力も無いけどさ」

それでも、絶対に。

するとマナさんは、今度は僕にこう返す。

「 なら、私が貴方を守るわ。この暗闇の中から私を連れ出し、導いてくれる貴方を、他にもない私の手で。……私、もつと強くなる。貴方を守るくらいに、どんなモノからでも護れるくらいに、きつときつと強くなる。だから
」

これは、約束。

僕／私は、貴女／貴方を

しばらく黙ったままでいて、それから、笑い合った。

当事者達にとっては、はにかんだような笑み。

しかし端から見れば、それは脆く儂く、酷く歪いびつな笑い方だったかもしれない。

どこかおかしな、不思議な関係。

なんて頼もしいのだろう。頼もし過ぎて、ヒロインというよりまるで英雄ヒーロー、あるいは騎士様だ。

じゃあ守られてる僕はなんなんだよ、とかいうツッコミはなし。

「じゃあまずは、他の人にしてるように私に対しても自然な口調で話せるようにしてね？」

「分かりまし……じゃないか。ああ、分かったよ。鋭意努力する」
取り敢えずごろりと横になった。

ほぼ無意識に、口許を覆うようにして手を宛てがう。

これは、僕が思索を走らせる時の癖だった。

記憶喪失、か。

確か、ストレス等を要因とする心因性のもや、一番イメージし易いであろう外傷性、薬剤の副作用である薬剤性の三種類が主な原因であった筈だ。

この場合、意識を失う直前のごく一時的な記憶障害である僕はともかく、長期に渡る記憶が失われているマナは薬剤性の可能性は低いと考えていい。

だとするなら、やはり外傷性の線が濃厚か。

彼女の右目に巻かれた頭の包帯も気になる。あの下に原因である怪我が隠れている可能性も考えられるだろう。むしろ、そう考えた方が自然だ。

そういえば何故、マナは包帯を眼帯のように巻いているのだろうか。

僕はその理由を知らない事に、今更のように気付かされた。

「えーと……なあ、マナ。その包帯、外して貰えたりしないかな？」
思い立ったがなんとやら。普段通りの筈なのに違和感の有る言葉遣いでストレートに聞いてみる。

するとマナは焦りに焦った様子で、

「だ、駄目、ぜったいにダメ！ これを見せるのだけは嫌よ！」
拒否された。

目をつむって首をブンブン振り回す様は、ちょっと彼女のイメージからズレてて可愛らしい。

「ご、ゴメン……」

確かに、流石にそれはデリカシーが無いというものだろうと思いつく。すぐに謝罪。

肩で息を荒くさせているマナを見る限りでは、もはやこれ以上聞くに聞けないか。

「ん、悪かった。記憶喪失について何か分かるかもって思ったんだ、ゴメン」

「……いえ、私も急に取り乱したりしてごめんなさい」
やがて落ち着いて冷静になった。

「包帯、新しいのに取り替えたりしなくていいのかな、って思ってたさ」

「うん、汚れないから……というより、妙なことに汚れが出ないのよ、此処に来てから」

その違和感は僕も感じていた。

信じられない程に傷の治りが早いのに対して、身体から出る筈の汚れが少ない というよりは、ほぼ全く無いのだから。

この街での高い治癒力を、代謝能力が高まったことが理由であると考えればそこに矛盾が生まれることになってしまふ。

代謝が高いなら、老廃物の排出は更に多くなるからだ。

「どうなってるんだ、僕達の身体は……」

反現実能力、銘を刻まれた首輪、自然治癒力の上昇、代謝機能の異常、環境への適応ともいうべき慣れ。

そのどれもに心当たりはなく、不気味で得体のしれない異変に不安と恐怖を禁じ得ない。

……筈なのだが。

「まあ放っておいても髪は傷まないし、肌も荒れないし。好きで浴

びてはいるけど、汗もかかないからいざとなれば水浴びしなくても大丈夫ってことだから。意外に凄く便利よ、コレ」

こんな異常事態にも関わらず、マナは十二分に適応していたようだった。不安に駆られまくっている僕とは大違いだ。

ちなみに、水浴びはビル二階の奥にある大きな風呂を見張りを置きながら一人ずつ使っている。

電気が無い為にお湯こそ沸かないが、水道が通っている事がこれほどまでに嬉しいとは思わなかった。

とはいえそれも二日に一回程だが。

ちなみに一度西園君がシャワーを使っている時に、女子のシャワーと勘違いして寿吹君が「覗きは漢の浪漫じゃよ」とかなんとかほざいて特攻をかけようとしていたのを、必死になって僕が止めることになったのは誰にも言わないでおくべきか。

まったく、僕と並んで戦闘力皆無の癖によくやる……。

ただし次からはマナに被害が出そうになった時点で殺す。社会的に。

むしろ切り落とす。男性的に。情けはない。

……なんか想像がエスカレートしてきた。

と、そんな恐ろしい　リア充爆発しろ　な感じの事を考えていた時にふと思いついたのは、なぜか彼女　マナが水浴びをする情景であった。

人形のように美しく可愛いらしい、綺麗に整った顔立ち。

まるで思い出に似たセピア色をして、宝石のように澄み切った瞳。さながら、白磁器の如く白い肌をして。

瞳と同じ透き通った暗褐色の髪は、浴びた水に流れ肩や背に濡れ張り付き、艶めかしく白に映えている。

一糸纏わぬ少女の素肌。

なだらかな曲線は未成熟でありながら女性的な美しさ包含し、見る者の心臓を高鳴らせるような光景を作り出す。

それは右目に巻かれた包帯すら相俟って、一枚の名画のように神々

しさを放っている

「……って、何考えてんだ僕はっ!？」

危なかった……。もう少し我に帰るのが遅かったら……。いや、考えるのはよそう。これじゃただの変態野郎だ。

そういえば生まれてこの方、僕は他人に異性というものを意識したことが殆どなかった気がする。

もしかしたら僕って、そういう方面に耐性無いんじゃないだろうか。

人を××になったのなんて初めてで。

それは僕にとつて、初めての感覚だった。理解できないような気がしてならなかった。

この感情がどういったものなのか、はっきりとは分からない。

でも、もし本当に人を好きになれたのであればとすれば。

それはきつと 素敵なことだと思ふのだ。

と、今の妄想に違和感。

「……そういえば、首輪付いてたんだっただよな……。何か足りないと思ったら」

……って止め止め、想像はしなくていい。

ああ、丁度いいや。

「なあマナ、悪いけどここになんて書いてあるか読んでくれないか?」

言っ指差すのは右の首下。

つまり、首輪の銘を読んでもらおうという訳である。

「……?」

よく分かっている風なマナ。

首を突き出す僕。

「読めば良いの? えっと……」

目を懲らして顔を寄せるマナに緊張しつつ、僕は読み上げられるのを待った。「あ、本当。何か書いてある……。ええと」

「 Remember . 1 / 1 2 0 , 0 0 0 , 0 0 0 」
「 ……何? 」

瞬間。

空は色を失い、辺りは薄闇に包まれる。

さながら、スイッチが押されて照明が落ちたように。

あたかも、昼と夜が反転した。

変革は、呆れるほどに淡泊に。無意味な程に唐突に。故ある故の自己矛盾。コペルニクスの展開を以って、ルールはようやく、その有り様を変える。

136

『秩序改訂』

黒き闇が世界を塗り潰したその時。

丁度拠点である地下倉庫に戻って来る所だった私と苦道わたくしさんは、その異変に驚愕しました。

……厳密に言うのでしたら、私だけ、になるのですが。

「にゃー、なんや真っ暗になってもうた……怖いわー、めっちゃ怖いわー。暗い所やと目えが利かなくなっつまう鳥達の気持ちがよく分かるわー。大空の支配者フォーエバー。ただしフクロウ、テメエは駄目だ」

その台詞は聞いたことがあるような。

ネタの為には普通の口調を使うことも辞さないらしい、若干お気楽極楽脳天気気味な苦道さん。

「言ってる場合ですか。刀を突き付けられたりと異常事態にはだいぶ慣れてきたといつて差し支えありませんが……流石にこれでは下手に動けませんわ」

「見えへんしなあ……ところで知つとる？ 雪山やなんやらで遭難中に夜になつてもうたら、体力の消耗や迷うことを考えて下手に歩き回らん方がええつちゅう話。つまり、最善の選択肢はここでお姉さんと真尋ちゃんが温め合いながら朝まで」

『 私は右手に握った剣を彼女の喉元に突き付けた 』

レイピアを右手に想造。あたかもあらかじめ持っていたかのように思考すれば、それはいつの間にか幻実になっている。

「あら、冗談はやめてくださる？ 真面目に考えるのと喉で直接剣を味わうのではどちらがよろしいですか？ いえ、此処は雪山ではないので遠慮なく私の分も頂いてくださいね」

「冗談やって、冗談！ それより、周りの警戒せんとアカンやろ……？」

私としては至極真面目な話題を振っている筈ですが、貴女が真面目に返してくださいませるので。

「しています。警戒しているから剣なんて物騒な物を出しているのでしょう……あら？」

そういう苦道さんも、見えにくいだけでさりげなく後ろ手に『硝子の槍』クリアランス 命名、霧音島寿吹さん。逝人様いわく「厨二ネーミン

グ乙」？ を握っていました。いつの間に？

……こつ見えて侮れません。

「さて……問題はあらへんやろ。忘れとるなあ真尋ちゃん。今のウチらには『暗いから見えない』つちゅーこと自体が思い込みやで？」

「え……ああ」

ええ、そういえばそうなのでしたね。

一度目を閉じ、今度はゆっくりと開く。

『目を凝らせば、闇に慣れた視界には景色がハッキリと見て取れた』

言葉（認識）の通り、暗い中での視界を確保する事に成功しました。

それほど難しい事ではありません。

例えば世界の在り様がどうであれ、それを観測する『自分』を変革するのが『反現実能力』なのですから。

尤も、あの龍崎さんレベルの能力を扱えるなら『夜間の視界を日中と寸分違わぬ状態にする』位は出来るらしいですが。本人は嫌がっていらつしゃったようですが、敵からは『怪物級』、と呼ばれているそうです。

光の少ない夜間における『反現実能力』の行使は、比較的眼や脳へのダメージが少ないので気楽に行えるのが利点だと思います。

辺りを見回し、

「居た……見つけました。逝人様とマナさ あれは!？」

思わず見てしまったそれは、その近くに浮いている三人目の人影。黒くて、病的。

鎖と布。

闇を纏って顕れた、死神。

『骸』は、再び私達の前に姿を現した。

どこから発しているのかも分からないようなあの声が、離れた私の頭に響いてくる。

私が聞き取れたのは、最後の一言だけでした。

『……もはや……人は糧を不要らず。飢えもなく、渴きもせず。さあ……存分に 殺し合え』

逝人様が何かを言い返そうとする前に、骸は闇に溶けて消えた。

今、この瞬間に何が起きたのか。

私達が正確に理解出来たのは、それからおよそ一日後の事だった。いつまで経っても空腹を訴えなくなってしまうた身体を抱えて絶望したのは。

空腹という人間らしさを、食欲という生命の証を、私達が根こそぎ奪い去られたと、気付いたのは。

既に手遅れになった、遙か後の事だったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3011q/>

『戦想 - Anti-real / Un-real -』

2011年5月29日06時10分発行